

聖徒の道

2
1994



末日聖徒
イエス・キリスト
教会

聖徒の道

1994年2月号



表紙——3人のドイツの若者が、時を同じくして合衆国での伝道に携わった。与えられた新たな自由を伝道の業に捧げたのである。(本誌「奇跡の伝道」p.12参照)

こどものページ——イタリアのフィレンツェに住むシモーネ・ミロのお話は、「友だちになろう」(こどものページ, p.2)にあります。写真撮影/アルフレッド・W・ウォーカー

一般

大管長会メッセージ——聖徒たちに与える勧告 大管長エズラ・タフト・ベンソン	2
「闇の中を歩む時、賛美歌を口ずさみました」 マービン・K・ガードナー	8
ハロルド・B・リー——主の矢筒の中の研ぎ澄まされた矢 ペトリーア・ケリー	18
愛のきずな ホセ・ロベルト・アラルコン・ナバレッテ	26
創造	32
旧約聖書の楽しみ方 マリー・ヘイゼン・ジョンソン	41
アブラハムの契約——万人の祝福のために ケント・P・ジャクソン	42

青少年

奇跡の伝道 ラリー・A・ヒラー	12
しるしを求めていた私 アマンダ・マリオッティ	48

定期特別記事

読者からの便り	1
家庭訪問メッセージ——神権の祝福を完全に享受する	25

こども

友だちになろう——イタリア、フィレンツェに住むシモーネ・ミロ ディエーン・ウォーカー	2
小さなお友だちへ——レックス・D・ピネガー長老	4
わずかなお金でも レスリー・ガルシア作	6
おもちゃばこ	9
分かち合いの時間——へいあん ジュディ・エドワーズ	10
ちいさなみんなのために——雨の日 ベトシー・スールテンフォース	12
モルモン経物語——コラホル	14

聖徒の道

1994年2月号

本誌は、末日聖徒イエス・キリスト教会の公式刊行物です。本誌は以下の言語で出版されています。月刊——イタリア語、英語、オランダ語、サモア語、スウェーデン語、スペイン語、中国語、韓国語、デンマーク語、ドイツ語、トンガ語、日本語、フィンランド語、フランス語、ポルトガル語、ノルウェー語。隔月刊——インドネシア語、タイ語、タヒチ語。季刊——チェコ語、ハンガリー語、アイスランド語、ロシア語。

大管長会：エズラ・タフト・ベンソン、ゴードン・B・ヒンクレイ、トーマス・S・モンソン
十二使徒定員会：ハワード・W・ハンター、ボイド・K・バックナー、マービン・J・アシュトン、L・トム・ペリー、デビッド・B・ヘイト、ジェームズ・E・ファウスト、ニール・A・マックスウェル、ラッセル・M・ネルソン、ダリン・H・オークス、M・ラッセル・バラード、ジョセフ・B・ワースリン、リチャード・G・スコット

顧問：レックス・D・ピネガー、ジョン・H・グロバーク、V・ダラス・メリル、ロバート・E・ウエルズ

編集長：レックス・D・ピネガー
教科課程管理部実務部長：ロナルド・L・ナイトン
教会機関誌ディレクター：トーマス・L・ピーターソン

国際機関誌

編集主幹：ブライアン・K・ケリー
編集主幹補佐：マービン・K・ガードナー
編集副主幹：デビッド・ミッチェル
編集補佐／こどものページ：ティエーン・ウオーカー

工程管理：トム・フォーセット、メアリーアン・マーティンデル

チーフアートディレクター：M・M・カワサキ
アートディレクター：スコット・パン・カンペン
デザイナー：シェリー・クック

制作：レジナルド・J・クリステンセン、ジェニファー・ダットワイラー、ジェーン・アン・ケンプ、デニス・カービー

配送部長：ジョイス・ハンセン

聖徒の道 1994年2月号第38巻第2号
発行所 末日聖徒イエス・キリスト教会
〒106 東京都港区南麻布5-10-30
電話 03-3440-2351

印刷所 株式会社 精興社/クロスロード
定価 年間予約/海外予約2,200円(送料共)
半年予約1,100円(送料共)

普通号150円、大会号350円

Copyright © 1994 by The Church of Jesus Christ of Latter-day Saints. All rights reserved. Printed in Japan. 英語版承認—1991年10月 翻訳承認—1991年10月 原題—International Magazines February 1994, Japanese. 94982300

●定期購読は、「聖徒の道予約申し込み用紙」でお申し込みになるか、または現金書留か郵便振替(口座名/末日聖徒イエス・キリスト教会 振替口座番号/東京0-41512)にて管理本部経理課へご送金いただければ、直接郵送いたします。●「聖徒の道」のお申し込み先…〒106東京都港区南麻布5-10-30管理本部経理課 ☎03-3440-2351(代表) ●「聖徒の道」の配送についてのお問い合わせ…〒213川崎市高津区溝の口131/末日聖徒イエス・キリスト教会 資材管理部配送センター ☎044-811-0417

The Seito No Michi (ISSN 0385-7670) is published monthly by The Church of Jesus Christ of Latter-day Saints, 50 East North Temple, Salt Lake City, Utah 84150. Second-class postage paid at Salt Lake City, UT 84150. Subscription price \$14.00 a year, \$1.50 per single copy. Thirty days' notice required for change of address. When ordering a change, include address label from a recent issue; changes cannot be made unless both the old address and the new are included. Send U.S.A. and Canadian subscriptions and queries to Church Magazines, 50 East North Temple Street, Salt Lake City, Utah 84150, U.S.A. Subscription information telephone number 801-240-2947.

POSTMASTER: Send address changes to Seito No Michi at 50 East North Temple Street, Salt Lake City, Utah 84150, U.S.A.

読者からの便り

霊的に強められます

大管長会メッセージに加え、「リアホナ」(スペイン語版)には、みたまによる経験を通して力を受けた会員たちの実話が掲載されています。この機関誌は、私たちの証をさらに強めてくれます。

「リアホナ」の発行を通じて、麗しい福音のおとずれを広めるみ業を推し進めている皆さんに感謝しています。おかげで私たちは励まされ強められています。

メキシコ、モンテレー南伝道部長
ホセ・ウリセス・ベレス・ゴンザレス

知識と真理に対する渇きを潤すもの

「リアホナ」(スペイン語版)にどれだけ感謝しているかをお伝えしたいと思います。今集っているカナダ人のワード部において、スペイン語を話すのは私たち家族だけです。ですから、スペイン語版のこの教会機関誌が届く日を、毎月、心待ちにしています。ちょうど渇いた草花が豊かな雨を待ち焦がれるように。

私の英語力は乏しいので、集会に参加しても、本来得られるはずの素晴らしい気持ちを、いつも味わえるわけはありません。でも「リアホナ」を読むと、そこに記されたメッセージによってとても強められます。教会幹部の勧告をはじめ、世界じゅうの兄弟姉妹の証を読んでいると、私の霊が活気づけられるのです。すべての会員が、毎月この機関誌を購読するよう願っています。

カナダ、オンタリオ州
オシャワステキー部トレントンワード部
J・エアネスト・メリーノ

神殿の祝福にふさわしく

「レトワール」(フランス語版。「星」の意)に感謝しています。生活の中で力と慰めを得るよりどころとなっています。

先日、スイス神殿の再奉献式に出席するという大きな祝福にあずかりました。大管長会をはじめとする教会幹部の話を聴けたのは、すばらしい経験でした。彼らは、主からの靈感に満たされていました。これまでにないほど、主のみたまを感じ、天父への愛と感謝の涙が私の目にあふれました。

神殿は主の宮居であり、参入するためには、本当にふさわしくならなければならないという証が私にはあります。これまで神殿を出るときには、生活を改善し、主に一層従おうという望みを抱くことができました。また、霊的な力を求めて神殿に参入すると、まさにその力を受けることができました。

フランス、ナンシーステキー部
フォルバック支部
エレヌ・デルソー

伝道の道具として

宣教師はますます増え、全世界にイエス・キリストの福音を宣べ伝えていきます。私もそのひとりとして働けることに喜びを感じます。

「リアホナ」(スペイン語版)は、伝道する際、多くの人の心に触れる助けとなっています。この機関誌は、人々が改宗し、バプテスマを受けるうえで役立っています。「リアホナ」を与えてくださった天父に心から感謝しています。接する人々に福音を分かち合えるのは、この機関誌のおかげです。

ペルー、アレキバ伝道部
ホルヘ・メリーノ長老



聖徒たちに与える勧告

大管長

エズラ・タフト・ベンソン

教会としてまた個人として全世界に神のみ業をどのように推し進めていくことができるかを、お話ししたいと思います。

まず初めに、家庭を強めることについてお話ししましょう。家庭は文明の基であって、いかなる国家もその質において、国民が構成する家庭以上の存在になることはできません。家庭は教会の堅固な土台です。家族の長となるかたがたに家庭を強めるように呼びかけるのはそのためです。

私たちは、結婚は、ある賢明な永遠の目的のために神によって制定されたと信じています。家庭は正しい生活を送るための礎です。父親、母親、子供という神が定められたこの責任は、まさに時の初めに与えられました。

神は父親を家庭の管理者として定められたので、父親には家族を扶養し、愛し、教え、導く責任があります。母親の責任もまた神が定められました。母親は子供を身ごもり、産み、育て、愛し、教育します。彼女たちは夫の助け手であり、相談相手となります。

神のご計画に男女間の不平等はありません。ただ、それぞれ異質の責任を負っているのです。



結婚はある賢明な永遠の目的のために神によって定められました。家庭は正しい生活を送るための礎です。

子供たちも同様に聖典の中で、両親に対する義務について教えられています。

「子たる者よ。主にあって両親に従いなさい。これは正しいことである。

『あなたの父と母とを敬え。』これが第一の戒めであって、次の約束がそれについている、

『そうすれば、あなたは幸福になり、地上でながく生きながらえるであろう』(エペソ6:1-3)と使徒パウロは言っています。

両親がともに寄り添って愛を抱き、一致しながら天より与えられた責任を遂行し、子供たちがこれに愛と従順さをもってこたえるときに、大いなる喜びがもたらされるのです。

最近、ある教会員から手紙を受け取りました。中にはその夫婦が子供を育てるうえで直面している問題やチャレンジについて書かれていました。

彼らは神殿結婚をしていましたが、その後いつの間にか不活発になってしまい、つい最近になって再び活発に教会の責任を果たすようになった人たちでした。子供たちに福音の教えを忠実に守らせ、自分たちが経験した落とし穴やほかの家族が陥った過ちを避けさせるためにはどのようにしたらよいか、個人的な助言を求めてきたのです。

別の言い方をすれば、その人たちは「どのようにすれば家族を霊的に強めることができるでしょうか」と尋ねてきたわけです。

この大切な質問について、皆さん一人一人に考えていただきたいと思います。さらに、この質問に対するひとつの答えとして、過去多くの幸せな家族によって試され、実証されてきた方式について考えていただきたいと思います。この方式は、互いに愛と調和、誠実さをはぐくむために、また福音の原則を理解するために利用されてきたものです。

幸せな家族は互いに愛と尊敬の気持ちを抱いています。そして家族のだけれど、愛され認められていることを自覚しています。また子供たちは両親に愛されていることを知っています。したがって、彼らは安心感と自信を持

っています。

堅固な家庭では効果的なコミュニケーションを図る気風が養われます。彼らは自分たちの問題について話し合い、みんなで計画を立て、共通の目標達成に向けて協力し合います。この目標を達成するための有効な手段として、彼らは家庭の夕べや家族会議を開きます。堅固な家庭の父親と母親は、子供たちと親密な関係を保っています。家庭では話し合いが行なわれます。父親によっては一人一人の子供と正式な面接をする人もあれば、形式にこだわらずに面接をしたり、定期的に子供たち一人一人と特別な時間を設けたりする人もいます。

どの家庭にも問題やチャレンジは必ずあります。しかし、幸せな家庭は、批判や口論を避け、問題解決に向けてともに努力しようとします。互いのために祈り、話し合い、励まし合います。ときには、家族のひとりのためにともに断食をします。

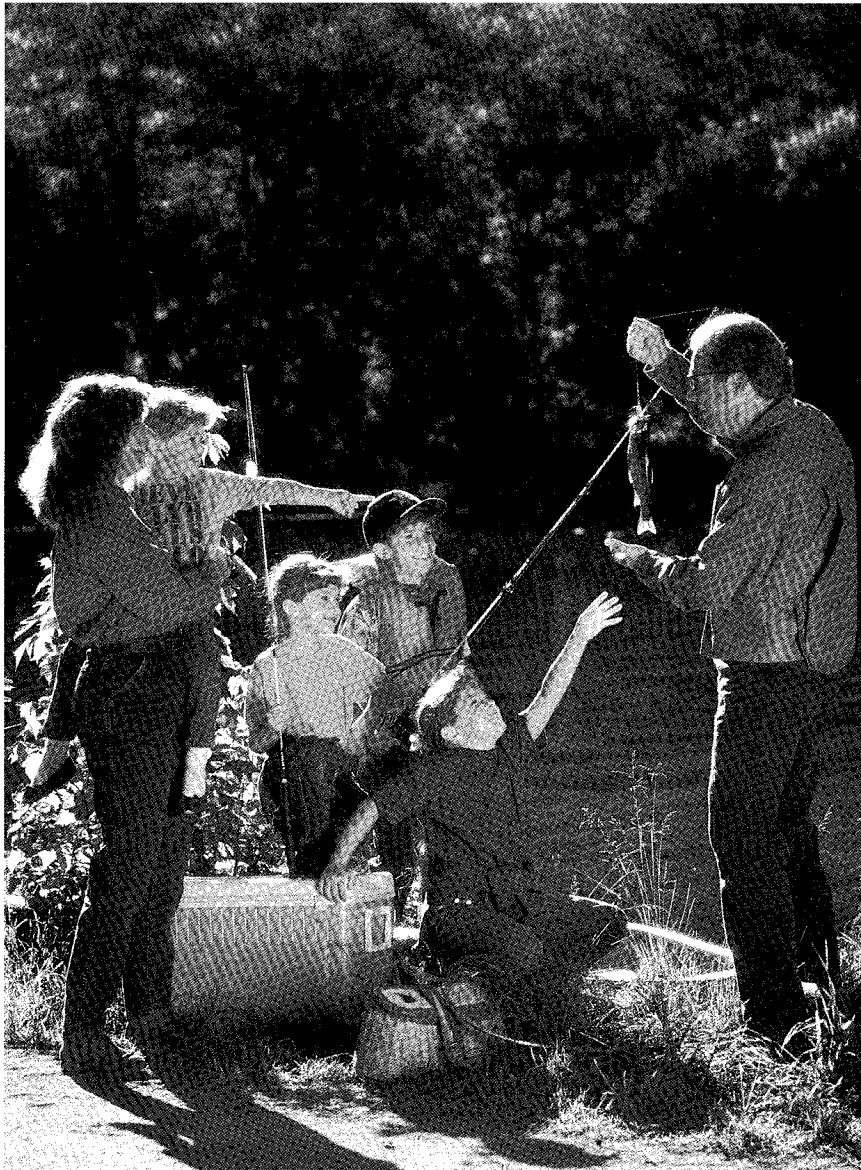
幸せな家庭は、計画、仕事、休暇、レクリエーション、親族の集いなど、何事も一緒に行ないます。

賢明な両親は、悪に汚れた環境で子供たちを育てるのは容易ではないと知っています。それだけに、最も健全な影響を与える手段を入念に講じています。道徳的な原則を教え、よい書物をそろえて読んでいます。テレビ番組を選択し、人を高めるよい音楽を取り入れています。しかし何よりも大切なのは、正しい考え方をはぐくむ方法として聖典を読み、聖典について話し合っているということです。

幸せな末日聖徒の家庭では、両親が子供たちに理解できるように、神に対する信仰、悔い改め、バプテスマ、聖霊たまものの賜について教えています。(教義と聖約68:25参照)

このような家庭では、絶えず家族の祈りがささげられています。祈りは、祝福に対する感謝の気持ちを表わす手段であり、へりくだって全能の神に依存していることを認め、力と支持と必要なものを求めるための手段なのです。

これこそ幸せな家庭を築くうえで、試され実証された公式なのです。私はこの方式に従うことを、皆さんにも



幸せな家庭は、計画、仕事、休暇、レクリエーション、親族の集いなど、何事も一緒に行ないます。

お勧めします。

私と妻はシオンにおける両親として、祖父母として、さらには曾祖父母として、家族が皆ともに永遠に住み、ひとり残らず神のみ前にふさわしい者となるように望んでいます。

教会のすべての家族がそのようになることを私は切に願ひ、祈っています。

私たちにはこれまでにない、さらに大いなる霊性が求められています。さらに大いなる霊性をはぐくむには、聖典に示されているように、キリストのみ言葉をよく味わうことです。

また私たちは、家族がそろって礼拝行事に参加し、ま

たともに過ごす時間を取れるように、神権指導者のかたがたに安息日における管理集会を最小限にとどめるようお願いしました。皆さんがこうした集会をなくしたために空いた時間を利用して、クリスチャンとしての奉仕を行ない、親類の家を訪問し、家庭の夕べを開き、聖典を学んでくださるよう望んでいます。

教会での召しを受け入れ、召された職務を忠実に果たすように皆さんに勧告します。互いに奉仕し合ひましょう。全力を尽くして召しを果たしましょう。そうするとき、皆さんはほかの人々に祝福をもたらす器となり、自分の霊性を高めることもできるのです。

貧しい人、病気の人、困っている人に心を配ってくださるようお願いします。伴侶を亡くした人やひとり親の家庭が援助を得られるようにするのは、キリスト教徒としての責任です。「父なる神のみまえに清く汚れない信心とは、困っている孤児や、やもめを見舞い、自らは世の汚

れに染まらずに、身を清く保つことにほかならない。」(ヤコブの手紙1:27)

神の戒めを守ってください。そうすることによって、罪の束縛を免れることができます。

「汝心を尽し、勢力と意思と体力とを尽して主なる汝の神を愛すべし。また、イエス・キリストの名によりて神に仕うべし。」(教義と聖約59:5)

「すべての事の中に神の御手のあることを告白せよ。」(同21節)

「苦しみを忍べ。」(教義と聖約24:8)

「心安かれ。」(教義と聖約61:36)

家庭や教会で神権者を支持する。(教義と聖約107:22)

子供を教え、光明と真理をもって導いてください。(教義と聖約93：40, 42—43参照)

参照)

什分の一を正直に納め、断食献金を惜しみなく支払う。(教義と聖約119：4；モーサヤ4：21参照)

「汝己れの如く汝の隣りを愛せよ。」(教義と聖約59：6)

子供たちを教える。彼らを光明と真理をもって導く。(教義と聖約93：40, 42—43参照)

「互いに欠点を探すを止めよ。」(教義と聖約88：124)

「互いに赦し合うべきなり。」(教義と聖約64：9)

儉約し、負債を避ける。(教義と聖約19：35参照)

むさぼりを遠ざける。(教義と聖約88：123参照)

正しい取り引きをする。(教義と聖約51：9参照)

安息日を聖くする。(教義と聖約59：10, 12—13参照)

酒やたばこ、強く熱い飲料を慎む。(教義と聖約89：5—9参照)

「不潔なるを止めよ。」(教義と聖約88：124) ポルノグラフィを避ける。

最もよき書物から学問を求める。(教義と聖約88：118参照) 悪を善とし、善を悪とするような文学や映画を避ける。

「姦淫を犯さない。「また何事にもこれに類することを為すことなかれ。」(教義と聖約59：6) すなわちパッシング、私通、同性愛、そのほかあらゆる不道徳な行ないを指します。

「絶えず徳を似て汝の想を飾るべし。」(教義と聖約121：45)

常に「徳と聖きを履み行うべし。」(教義と聖約38：24)

「外とうの如く愛のきずなをもて身に纏うべし。」(教義と聖約88：125)

神の口より出するすべての言葉に従って生活する。(教義と聖約98：11参照)

イエスの証をなすに雄々しくある。(教義と聖約76：51, 79参照)

交わした誓約を固く守る。(教義と聖約25：13参照)

「終りまで忍ぶ……。」(教義と聖約14：7)

これらをひと言で言えば、この世にあっても、この世

のものとなつてはならないということです。

教会の使命は、福音を宣言し、聖徒たちを全き者とし、死者を贖うことによって、人を救うことです。

この地上に神の王国を打ち建てるために、才能と手段の限りを尽くして努力していただきたいと思います。これは主のみ業です。

「神が生きておられ、今日もそのみこころをご自身の僕に表わされることを証いたします。この教会がイエス・キリストの教会であり、地上における神の王国であることを証いたします。

末日聖徒の皆さん、皆さんは称賛に値します。皆さんの信仰は立派なものです。これまでにないほど大いなる機会と祝福が私たちに与えられました。予言者ジョセフ・スミスのお言葉を借りて言うと、次のとおりです。「われらまことに偉なる大義に向って進まざらんや。進み行きて退くことなかれ。奮い起てよ、……進み進みて勝利に至れ。」(教義と聖約128：22)□

(1984年4月7日の総大会におけるエズラ・タフト・ベンソン会長〔当時〕の説教より)

話し合いのポイント

ベンソン大管長は次のように勧告された。

1. 家族を強めなさい。家庭は教会の堅固な土台であり、正しい生活を送るための礎である。
2. 聖典を学びなさい。私たちにはさらに大いなる霊性が求められている。大いなる霊性をはぐくむには、聖典に示されているように、キリストのみ言葉をよく味わう必要がある。
3. 教会での召しを受け入れ、忠実にその職務を果たしなさい。
4. 貧しい人、病気の人、困っている人に心を配りなさい。
5. 戒めを守りなさい。



「闇やみの中を歩む時、 賛美歌を 口ずさみました」

マービン・K・ガードナー

パラグアイに住むファウスト・トラース兄弟は、弟が病に伏しているとの知らせを受けた時、多くの時間と並々な犠牲が必要となることはわかっていましたが、見舞いに行くことにしました。しかし、トラース兄弟は、これから出かけようとしているその旅が、どれほど長期にわたる犠牲を伴い、さらには、自分と家族の人生を永遠に変えるものになるうとは、夢にも思いませんでした。

ナタリオ・ディエスといういちばん近くの村まで行くのに公的な交通手段は何もありませんでした。トラース兄弟は妻と子供たちを小さな農場に残したまま、1時間以上歩き続け、やっとのことでその村にたどり着きました。そこからバスに乗り、2時間かけてエンカルナシオンの町に到着しました。そこで彼は病気の弟を見舞いました。その夜のことで、下宿屋で、トラース兄弟はそこに住むふたりの若い青年から末日聖徒イエス・キリスト教会について初めて学んだのでした。

「私たちは、ほかのいろいろな宗教について勉強はしていましたが、感銘を受ける宗教がありませんでした」と奥さんのフェリシタ・トラース姉妹は語ります。「ただ今回聞かされた教えは、それまでに耳にしたどの教えともかなり違うということを夫は悟っていました。そのふたりの青年に、3カ月したらもう一度家族全員を連れて戻って来るのでバプテスマを施してほしいと告げていたのです。」

エンカルナシオンでメッセージを聞いたトラース兄

弟は、みたまに満たされて農場に戻ると家族に福音を宣べ伝えました。3カ月後、約束をたがえることなく、トラース兄弟は、トラース姉妹と子供たちを連れてエンカルナシオンへと出発し、バプテスマを受ける覚悟でまっすぐにあの下宿屋へと向かいました。宣教師はその日、トラース家族に求道者のためのレッスンをすべて教え、モルモン経と「福音の原則」を手渡しました。翌日、1981年5月12日、トラース夫妻、それにバプテスマの年齢に達していた5人の子供たちはバプテスマを受けました。それから彼らは帰途に就き、福音の勉強を始めたのでした。

教会を見失い、そして見いだす

1年後、もうひとりの子供であるセサルが8歳になりました。「『福音の原則』を読んでいた私たちは、この子もバプテスマを受ける必要があることを知っていました」とトラース姉妹は回想しています。「ですから、私たちは、息子をエンカルナシオンへ連れて行ったのです。」ところが1年前にバプテスマを受けたはずのあの場所、集会所として用いられていたあの貸家へ到着した3人はがく然としました。もうそこには教会がなくなっていたのです。「私たちはほかにどこへ行ったらよいか見当がつかず、あの教会の名前を掲げた建物を必死になってくまなく探し回りました。しかし、見つけれませんでした。こうして2日間さんざん探し回った挙げ句、

しかたなく町を後にしたのでした。」

教会との接触を断られたものの、彼らの福音に対する証あかしが弱まることはありませんでした。家族皆で福音を学び、主への礼拝を続けたのです。それから1年後、トラレーズ兄弟と姉妹はもう一度セサールを連れて、エンカルナシオンへと向かいました。彼らの胸には、今度こそあの教会に導かれ、息子にバプテスマを施してもらえるという信仰が燃えていました。

町に着いた時点では、どこから捜し始めたらよいのか見当がつきませんでした。トラレーズ姉妹はこう述懐しています。「そんな時、荷馬車に乗った牛乳配達人の姿が目に残りました。その人は町じゅうに牛乳を配達するはずなので、どこに教会の集会所があるか、ひよっとしたら知っているのではないだろうか、と夫は言いました。その人は知りませんでした、呼んでくれた職場の同僚が知っていました。『そこへ行ってみたいですか』と同僚の男性が尋ねました。こうして私たちは彼の荷馬車に飛び乗り、教会へ連れていってもらったのです。」

例の支部は、実はあの小さな家から別の大きな新しい建物に移転せいさんしていたのでした。その日は日曜日で、会員たちが聖餐会せいさんに集っていました。こうしてトラレーズ夫

妻とセサールはたくさんの会員と会い、初めて教会の集會に出席することができたのです。それは3人に心からの喜びをもたらしました。「支部長が、同じ場所で4カ月後に地方部大会が開かれると教えてくれました。セサールのバプテスマもその時に施せるので、また来てください、とのことでした。」4カ月後、トラレーズ兄弟の家族は全員でエンカルナシオンに赴き、大会に出席し、セサールのバプテスマに立ち会ったのでした。

「もうこれ以上、何もいりません」

大会の後、宣教師や教会の指導者が、遠い道のりにもかかわらず頻繁にトラレーズ家族を訪れるようになりました。トラレーズ家の人々は隣人とも福音を分かち合い、そのうちの何人かはバプテスマを受けました。そして、教会までの距離があまりにも遠く、犠牲も大きかったこ



ファウスト・トラレーズ兄弟(右)
と奥さんのフェリシータ姉妹。
「たとえ私たちの周りで
どれほど多くの戦争や問題が
起こっていても、
もし天父に近くあるならば、
そのような困難な状況を
くぐり抜けられるのです」
と語るトラレーズ支部長。

とから、1986年、ついにトラース家の自宅に支部が設立され、トラース兄弟が初代支部長となりました。

毎週日曜日、彼らの小さな家のふたつの部屋に通じる入り口に折りたたみ式のいすと説教壇が置かれ、礼拝堂として使われています。そして聖餐が祝福され、会員に配られます。レッスンは木の下、あるいは花壇のそばで行なわれます。「自分たちの集会をここで開けるようになって幸せです。もうこれ以上、何もありません」とトラース姉妹は言います。

「主のみたまが私たちのうえに注がれているのを感じます」とトラース支部長も語っています。

トラース家の人々は、週のうち幾晩か、隣人宅を訪れ、福音を教えています。「隣人と言ってもたどり着くまでにかなりの距離を歩きますが」と22歳になるスールマが話します。「私たちを受け入れてくれる人は多いのです。みんな私たちのことを知っていますから。」バプテスマは近くの川で行なわれます。

25歳になるテレサはウルグアイで伝道しました。23歳のマリアと19歳のフランシスコは現在アルゼンチンで伝道中です。また、22歳のスールマと18歳のセサルも伝道に出る準備をしています。「残念ながら、皆がすぐに伝道に出ることはできません」とトラース姉妹がほほえみながら、話してくれました。「貧しいですからね。」

家族全員が自分たちの小さな農場でともに働き、わずかな収入の中から皆で什分の一を集めて納めています。「毎朝、皆で早く起きて仕事の前に一緒に聖典を読んでいます」とスールマは語っています。「それからお昼になって昼食後また聖典を読みます。夜になると個人で聖典を勉強します。」家庭の夕べは月の明かりか石油ランプの明かりの下で開かれます。というも、彼らの家には電気が通っていないのです。

「犠牲により注がる、天の恵み」

1989年8月、父、母、11人の子供たち(もうひとりの子供は亡くなっている)、それに長女の夫と子供たち、合計19人が全員神殿に参入しました。「午前1時に家を出ました」とスールマは話してくれます。「日はまだ昇っておらず、外は真っ暗でした。そのうえ、雨が降って、道はすっかりぬかるんでいます。びしょ濡れになりながらも、泥道の上をはだして歩き、靴やかばんを手に持ち、子供を抱きかかえ、町へ町へと向かいました。闇の中を歩む時、皆でいくつもの賛美歌を口ずさみました。『犠

牲により注がる、天の恵み』と歌いながら歩いたのを今でも覚えています。」(賛美歌27番4節〔英文〕参照)

町に到着した彼らは、何度かバスを乗り継ぎ、途中でほかの教会員グループと合流し、ついに翌朝6時、ブエノスアイレスのアルゼンチン神殿に到着しました。全行程29時間の旅でした。

「私たちは神殿に入り、自分自身のエンダウメントを受け、永遠の家族として結び固められました」とトラース姉妹は語ります。「神殿は霊的で美しい所でした。みたまが、ここそまかに主の宮居である、と証してくれました。」亡くなった娘も彼らと結び固められました。また長女とその夫、そして子供たちも家族の結び固めを受けました。それから彼らは神殿に別れを告げ、帰途に就いたのでした。

帰る途中、彼らはエンカルナシオンに立ち寄り、支部の会員たちとともに教会の集会に出席しました。それから、自分たちの農場へと帰り着くまでの最後の1時間半、再び泥道の上を、靴とかばんを持ち、子供たちを抱きかかえ、はだしになって歩きました。「心は喜びでいっぱいでした。歩きながら、家を出発した時よりもたくさんの賛美歌を歌いました」とトラース姉妹は語ります。「私たちは『み恵み数えあげ』を歌いました。」(賛美歌153番参照)

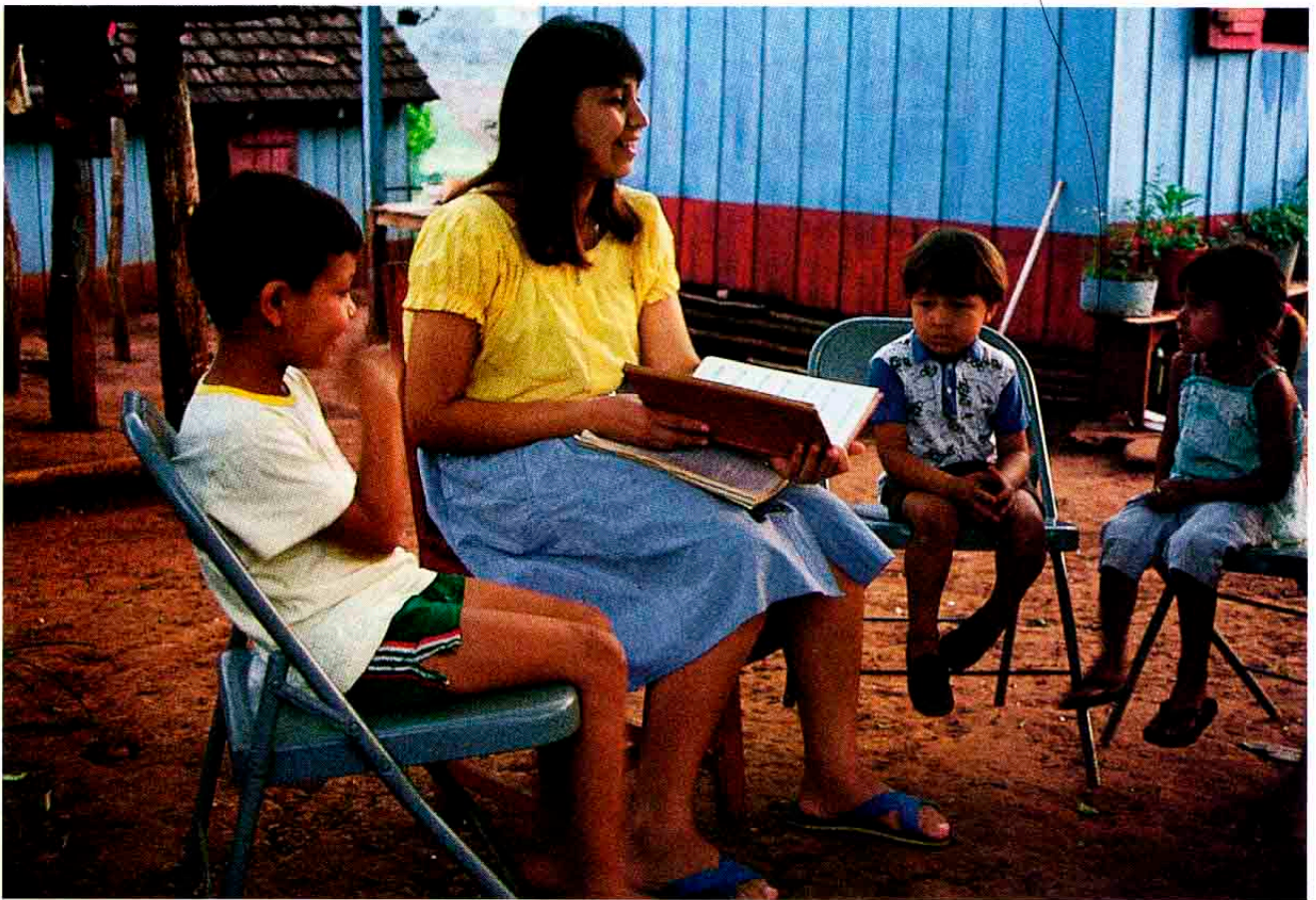
トラース支部長は、「私たち家族は本当にたくさんの恵みを受けました」と語っています。

「光と平安」

もう夕方です。1日の仕事、そしてその日の夕食も終わりました。丘の向こうに太陽が沈んでいくころ、家族はいつものように外の古ぼけた木製テーブルの周りに集まります。このテーブルは家の前の木の下に置かれています。ここでひとりずつ主の愛について証をするのです。

夜になると、彼らは心を和らげてくれる田舎のいろいろな音の響き渡る中、静かな声で語り合います。やがて雨が降りだすと、川辺でカエルやコオロギがやむことのない合唱を始めます。そよ風に吹かれて頭上の木の葉がさらさらと音を立てます。

夜のとぼりが暖かい毛布のように辺りを覆い、穏やかさと安心感、安らぎをもたらしてくれます。しばらくすると娘のひとりがそっと家の中に入り、ランプを持って出てきます。ランプに明かりがともされ、テーブルの周りの家族の顔が浮かび上がります。それ以外のもの、家



トラース家の屋外で初等協会のクラスを教えるスールマ。「自分たちの集会をここで開けるようになって幸いです。もうこれ以上何もありません」と母親のトラース姉妹は語っている。

や木々、それに庭などはすべて闇の中に消え去ります。まるでこの世のものがすべて、あっと言う間に消えてなくなってしまったかのようです。それから、ひとつまたひとつと星が頭上に瞬き始めるのです。

トラース兄弟はやさしい声でみずからの証を述べます。彼は、愛する救い主や予言者ジョセフ・スミス、生ける予言者や聖霊たまものの賜について語ります。そしてある夜に起きた次のような経験について家族に詳しく話しました。

その夜、トラース兄弟と何人かの息子は、隣人に福音を伝えた後、暗い田舎道を歩いて家に帰るところでした。月と星の光を頼りに歩きながら、一行はタバナクル合唱団のカセットテープを聞いていました。

「その時、示現のようなものを見たんだよ」とトラース兄弟は思い起こします。「天が開けて、主と思われるお方にお会いしてね。私たち家族は大きな戦争の光景

のさなかを歩いて通過しようとしていた。周りには人々が至る所で戦っていたよ。しかし、主が私たちのそばにおられたので、その戦争から何の危害も受けなかったんだ。戦争のまっただ中を無傷で歩いて通り抜けたのさ。主は私たちをととても美しい所へ導いてくださり、私の胸は光と平安、そして言い尽くせないほどの喜びに満たされたんだ。神のみ前にあるときの喜びとはこのようなものなのか、と想像したものさ。」

そこまでで示現は閉じ、ふと我に返ると、トラース支部長は前と同じように月の光のさす夜道を子供たちと歩いていました。子供たちはたった今トラース支部長の身にどのようなことが起こったのか知りませんでした。そこで彼はみずからの経験について子供たちに話して聞かせました。それからというもの、この出来事はトラース家の人々にとって大きな希望の源となっています。

「この経験は私たちの日々の生活の中で起こる出来事や将来起こる出来事を象徴しているのだと思います」とトラース支部長は語ります。「たとえ私たちの周りでどれほど多くの戦争や問題が起こっていても、もし天父に近くあるならば、そのような困難な状況をくぐり抜けられるだけでなく、祝福を受けられるのです。」□

奇跡の伝道

ラリー・A・ヒラー



PHOTOGRAPHY BY THE LEHMANN FAMILY, RICHARD ROJINEK, JOHN LUKE, ALVIN MAYO, AND THE AUTHOR

レーマン家のミハイル、ペーター、マッチアスの3人兄弟は、有刺鉄線とコンクリートの壁の向こう側でそれまでの人生を過ごしてきました。その壁には逃亡しようとする者ならだれでも撃ち殺してしまう見張りがいました。仮釈放の望みは皆無という宣告を背負って生きているようなものでした。

彼らは無期懲役を受けた囚人たちなのかって？ いいえ、違います。レーマン家は活発な末日聖徒の家族なのです。ただひとつ「過ち」があったとすれば東ドイツに生まれてしまったことでしょう。そしてレーマン家の将来の子孫たちも有刺鉄線の向こう側で生まれ育つと思われました。

ところが突如、1989年の11月、東ドイツ政府が崩壊し、監視塔は無用となり、東西を分裂させていたベルリンの壁は粉々に打ち砕かれました。

多くの東ドイツ人が買い物袋をいっぱいにするために西ドイツに押し寄せている時、レーマン家のペーター、マッチアス、そしてミハイルの3人は急いで伝道に出るための申請書を書いていました。

人と違った家族

3人の若者の両親であるルドルフ・レーマン、ルース・レーマン夫妻は、1961年、あの悪評高いベルリンの壁が築かれるほんの数カ月前に教会に入りました。一般的に子供の数も少なく、無神論を公の宗教としているこの国にあって、彼らは7人の末日聖徒の息子を育てました。

東ドイツのほかの市民と同様、旅行していい場所、いけない場所、行っていい学校、就いていい職業、読んだり

話したりしてはいけないことなど、すべてが決められていました。家庭の中で宗教を信仰したり、小さな支部に集まることはできましたが、その集会には時折政府の役人が訪れることもありました。聖典を所持することは許されていましたが、教会のほかの出版物は国境で止められました。国内での伝道は禁止されており、伝道に出ることなど問題外でした。この国で忠実な教会員として成長していくのは大きなチャレンジでした。

ペーター・レーマンは学校の公民の授業の時に、からかわれたことを思い出してこう語ります。「私がモルモンであることはみんな知っていました。ひょっとすると私の生活について、私以上によく知っていたかもしれません。私たちは監視されていました。政府の役所にある私たち家族の記録にはどれも赤い印が付けられていたと思います。モルモン教会に属していて、7人の息子がいて、とにかく私たちは変わった家族だったのです。」

ミハイル・レーマンは過去を振り返ってこう語ります。「両親から、人前である事柄については話さないようにしつけられました。隠しマイクか何かを持っている人がそばにいるかもしれないので注意するようにと教えてくれたのです。だれを信じていいかまったくわかりませんからね。」

このような状況に置かれるとき、人は教会から完全に離れてしまうか、教会に固くつき、互いにしっかりと結びつくかのどちらかです。東ドイツにおいては、環境にめげず信仰が育っていききました。スペンサー・W・キンボール大管長が語ったように信仰が奇跡に先駆けてはぐくまれていったのです。



左——伝道に出る直前、教会としても使われていた自宅の前に立つマッチアス、ミハイル、ペーター。上——いまや安全になったベルリンの壁に立つ父親とマッチアス。



あかし 証の奇跡

信仰によってもたらされる奇跡のほとんどは静かなものでした。それらは、什分の一を納め、知恵の言葉を守ることによって得られる祝福や、癒しという形で与えられました。また、そのような場所にあっても証を持ち続け、はぐんでいけたということ自体が奇跡でした。

ミハイルはこう語ります。「学校に行くようになった時大変だったのは、両親が神様について教えてくれる一方で、生徒も先生もみんなこぞって私に『神なんてありはしない』と言ってくることでした。」

ペーターも同様に言っています。「学校の公民の授業では、政府の方針として無神論を教えられました。クラスのみならず宗教を軽んじ、宗教団体に属する人は政府に反対しているのだと言いました。政府が信仰されているようなものでした。」

両親がある事柄について教えると、社会はそれとまったく正反対の考え方を教えるということがよくありました。どこの末日聖徒の若人もそうですが、レーマン家の兄弟たちも自分で知る必要がありました。



「私たちは本当にすばらしい家庭に育ちました。」ペーターはこう述懐しています。「両親が私たちに望むことを行なう大切さはある程度わかっていました。しかし、学校で味わったたくさんの経験、つまり先生やみんなからつらく当たられたり、神を否定するように言われたりしたことを考えた時、自分にこう問いかけました。『なぜこんなことをしているんだろうか。でも、

これには大切な意義があるはずではないか』と。そしてひざまずくとう祈りました。『自分自身で知りたいと思います。自分の心で感じさせてください。』

私は祈り、モルモン経を勉強しました。私が証を得たのはこの時でした。その小さな証は少しずつ育っていきました。」

神殿の奇跡

努力を重ねて証を得ることは私たちの成長に欠かせません。でも、ある事柄が真実であり必要であると知りながら、それを実現するのが不可能に思えるときにはどうしたらよいのでしょうか。たとえば、神殿がいかに大切かを教えられながら、そこに行くことができないとしたらどうでしょう。そんなときにはレーマン家族やほかの東ドイツの聖徒たちが行なったようにするしかありません。祈り、将来神殿の祝福を受けるにふさわしく自分を備えることです。彼らにとってその将来ははるか遠いものに思えました。

しかし信仰深い人々でも、ときには突然の祝福の大きさにびっくりすることがあります。1982年、東ドイツ政府が教会に神殿建設を許可した時、会員たちはうれしさと驚きでいっぱいでした。「本当に驚きました。」ミハイルが端的な言葉で言います。「その時から、ほかのすべてのことも可能になるのだと悟りました。」

3人は父親に連れられて建設中の神殿を見に行った時のことを語ってくれました。ある晩、彼らは仕事を終えた後、壊れかけた自転車にまたがり、上り下りの多い田舎道を40キロもこぎ続けました。そして神殿の建設現場に着いた時、道路の反対側に立ち、そびえ立つ壁をじっと見詰めました。



フライベルク神殿(上)がドイツ民主共和国に建てられた時、レーマン家族はその前にたすみ涙を流した。いつの日かそってソルトレーク神殿の前に立つことになるとは夢にも思わなかった。(左、上)



3人は合衆国各地の伝道部に散らばった。マッチアスはアイダホ州へ(左)、ミハイルはテネシー州へ(中央)、そしてペーターはコロラド州へ(右)召された。3人は自由であるとはどんなことかを知った。そして彼らはさらに大いなる自由のおとずれを広めるための嘗

れある伝道をなし終えた。そして、ルドルフ・レーマン、ルース・レーマン夫妻がドイツから渡米し、コロラド州グランド・ジャンクション(下)で皆が再会し、抱き合って喜んだ。現在、彼らはドイツに戻って、熱心に信仰の道を歩み続けている。



そして彼らは涙を流したのです。

約束された祝福

レーマン家の上の4人の兄弟たちは教会で育ち、職業に就き、結婚をしましたが、伝道に出るという望みを本当に持っていた者はだれもいませんでした。下の3人も同じ道を歩むと思われました。

下の3人のうちでいちばん年上のミハイルはこう言います。「教会ではだれもが伝道資金をためることについて話しはしますが、あのベルリンの壁があったので、若い人はだれも伝道に行けるとは信じていませんでした。」

「両親は伝道資金をためるように教えてくれました。」マッチアスは語ります。「だから私もそうしました。でも本気で行けるとは思っていないませんでした。」彼の祝福師の祝福には

伝道に出ると書かれていましたが、年を取ってからのことだろうと考えていました。神殿が奉獻される前に行なわれたオープンハウスでステーキ部宣教師として働いていた時、マッチアスはこれが祝福文に書かれていたことだろうと思いました。

それでは、末っ子のペーターはどうだったでしょう。彼には兄たちの知らない、あることがわかっていました。ペーターは1986年に、神殿の奉獻が行

なわれた後、祝福師の祝福を受けました。祝福を受けるためにポーランドとの国境にある小さな町まで行ったペーターは、古ぼけた賃貸の建物を使っている小さな支部に集いました。みたまが豊かに注がれた支部でした。それから祝福師の家を訪ねました。彼はその時のことをこう語ります。

「祝福の中で私は専任宣教師として伝道に召されると言われました。外国で、外国語を使って働くであろう、しかもそれは若い時期に実現するだろうと言われたのです。主をととても近く感じ、気がつくとい私は泣いていました。それから私は毎晩祝福文を読み、祈りました。また、伝道資金をため始めました。自分が間もなく召されるとわかっていましたからです。」

ペーターには自分がどこに行くのかはわかりませんでした。(ロシア語を上手に話すことができたのでロシアかもしれないと思ったりもしました)また彼は祝福文を両親には見せましたが、なぜか兄弟たちには見せませんでした。「私は家族の中でもちょっと変わっていました。いつも『ぼくらは伝道に行くんだ。きっとすばらしいよ。3人でいろんなことを変えていくんだ』と言っていました。兄のマッチアスは疑っていましたが、私には祝福文がありました。私にはわかっていたのです。」

しかし、ペーターにもそれがどうやって実現するのかはわかりませんでした。

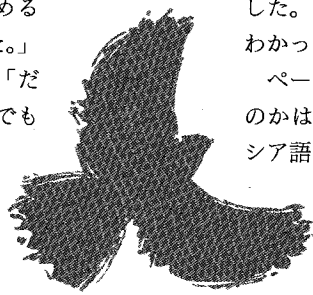
奇跡の伝道

そして恐むべき壁が壊される少し前のこと、東ドイツ政府は50年ぶりに専任宣教師が東ドイツで伝道することを許可し始めました。同時に、ほんの一握りの東ドイツの宣教師もほかの国に伝道に出ることを許可しましたが、どういうわけかその中にレーマン家の兄弟はひとりも入れませんでした。

しかし、世界じゅうのテレビをにぎわせたあの11月の数日間がやって来ました。東ドイツの人々がハンマーや鉄の棒を手にベルリンの壁にまたがり、すでに信仰と祈りによって徐々に崩れかけていた障壁を文字どおり打ち壊していったのでした。

ペーターは真っ先に宣教師申請書を提出し、マッチアスとミハイルもすぐ後に続きました。3人ともがアメリカに召されました。ミハイルはテネシー州ナッシュビル伝道部へ、マッチアスはアイダホ州ボイス伝道部へ、そしてペーターはコロラド州デンバー伝道部へ召されました。

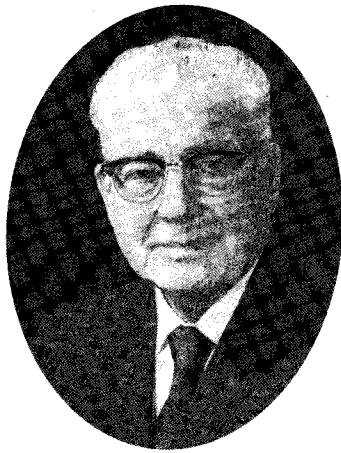
彼らは自由であることがどんなことかを知りました。今、彼らは人々が別の形の壁を打ち崩す助けをしようとしています。改宗し、生活を変えることによって、人は霊的な自由を勝ち得るのです。レーマン家族に尋ねてみればわかるように、これこそ最も偉大な自由ではないでしょうか。□



ハロルド・B・リー

主の矢筒の中の研ぎ澄まされた矢

ペトリーア・ケリー



末 日聖徒イエス・キリスト教会の大管長に支持されてから最初の説教の中で、ハロルド・B・リーはジョセフ・スミスの言葉を引用した後、次のように語りました。「私も高い山から転がり落ちるごつごつした岩のようなところが多く、もろもろの経験にもまれ、磨かれ、問題を克服して全能者の矢筒に入る洗練された矢となるべく備えられたように思われます。」

私も苦しい事柄に遭遇して、従順を学ぶ必要があったに違いないのです。それは私のためになる経験であり、現世のさまざまな試練を克服できるかどうか試すものでした。」

ハロルド・B・リーを洗練された矢とするための備えは幼いうちから始まりました。ハロルドは1899年3月28日、アイダホ州クリフトンの貧しい農家に生まれました。この家について彼は、「お金で買えないものなら何でもありました」と言っています。両親サミュエル・マリオン・リー Jr. とルイザ・ビンガムはこの世の富には恵まれませんでした。6人の子供に勤労の貴さと福音の真理を教えました。家族全員での農作業は毎日、夜明け前に始まり、暗くなるまで続きました。

みたまに従う

ハロルドは幼くしてみたまのささやきを知り、その促しに従うことを学びました。まだよちよち歩きの子供だったある晩のこと、家族はドアを開け放して雷を見物していました。ハロルドは「玄関を何度も出入りして遊んでいたのですが、突然母親が何の前触れもなく強く突いたために、玄関から後ろ向きに飛ばされてしまいました。次の瞬間、雷が台所のかまどの煙突から落ちて、開いたドアを抜けて家のすぐ前にある大きな木を上から下に真っぶたつに切り裂いたのです。」母親の素早い直感的な行動がなければ、きっと命を落としていたことでしょう。母親はその後何度も同様の靈感によってハロルドの命を救っています。

また、ハロルド自身も少年のころ、みたまの導きを受けて従順になることをしっかりと学びました。「私は8歳

になったかならないころ、父親に連れられて少し離れた農場に行きました。そこで父親が働いている間、男の子の好きそうな遊びに夢中になっていました。……さくの向こうを見ると、壊れかかった小屋があり、興味を引かれました。それが城で、自分はそこを探検するのだと空想し、さくを越えてその小屋の方へ行こうとしました。その時です。非常にはっきりと『ハロルド、行ってはいけない』という声が聞こえたのです。辺りを見回して声の主を探しましたが、父親は畑の向こう側のずっと離れた所にいました。そこから私の姿が見えるはずはありませんし、辺りにはだれもいませんでした。私は目に見えぬ何者かがそこに行かないように警告してくれたことを悟りました。そこに何があったかはわかりません。しかし、私は早くから、目に見えない世界からの声を聴くことができると知ったのです。」

壊れた小屋が若きハロルドを招いた。しかし目に見えない何者かが中に入らないように警告した。



囑望された将米

ハロルドは並外れて頭脳明晰な少年でした。読み書きの能力に優れていたため、学齢より1年早く小学校に入学を許可されたほどです。その後もバスケットボール、吹奏楽、弁論などさまざまな方面で活躍しながら学業に励みました。そして熱心な勉強と努力が実って、17歳の若さで教員の資格試験に合格し、実家から15キロほど離れたアイダホ州シルバースターにある、教室がひとつだけの小さな学校の校長兼教員として赴任しました。翌年にはもっと大きな学校の校長になっています。そして4年間の教員生活を経て、21歳で合衆国西部諸州伝道部に伝道に召されました。当時監督だった父親は、伝道への出発を前にこう言って励ましました。「ハロルド、父さんと母さんはおまえなら、立派に召しを果たせると信じているよ。」

アイダホの小さな農場出の若者にとってデンバーの町は胸躍る所だったことでしょう。しかし、ハロルドは家庭で学んだ信条を早速伝道の業にも応用し始めました。それは、「神が私を通して何かを達成しようとなさるなら、私は常に働き続けなければならない」ということです。宣教師としても卓越した働きをし、2年間の伝道期間中に多くの責任を与えられました。解任後は、ソルトレークシティーに移り住みました。それは改めて教職に就くため

と、伝道中遠くから見初めていた、賢明で美しいファーン・ルシダ・タナーと交際するためでした。1年後、ふたりはソルトレーク神殿で結婚しています。

教員の収入を補うため、夏休み中に始めた図書関係の仕事が、間もなくファウンデーション出版の地域マネージャーというフルタイムの仕事に発展します。また、リー夫妻はモリーンとヘレンというふたりの娘に恵まれました。その後ハロルドは空席のあったソルトレークシティー委員会の委員として任命され、囑望される政治家としてのスタートを切ったのです。この若い家族は成功と繁栄への道を順調に歩みだしたように見えました。娘のひとり、父は熱心にそして迅速に働く習慣を決してなおざりにしなかったため、普通の人より多くを達成することができたと話しています。

愛に満ちた指導者、父

ちょうど大恐慌が起こったころ、ハロルドは31歳にしてパイオニアステーク部のステーク部長に召されました。ステーク部内の半数以上の会員は失業状態にありました。主から靈感を求めつつ、副ステーク部長と監督たちの助けを得て、リーステーク部長はステーク部の会員を援助する計画を考え出しました。倉庫の提供を受けて、余剰品がそこに集められました。また、農場

主たちと契約し、刈り入れの労力を提供する代わりに作物をもらうことになりました。扶助協会の姉妹たちにはその作物を瓶詰にする責任が割り当てられました。そして、この食料は必要な人々に配給されたのです。さらに、寄付された資材を用いて体育館を建設することにより、失業中の人々に労働の場を提供しました。

ハロルド・B・リーは物事の本質を大きな視野で捕らえ、独創的かつ効果的な解決法を考えつく才能にたけていました。また、個人をないがしろにすることは決してありませんでした。ステーク部長になって最初のクリスマスのことです。娘が通りの向こうの友達にクリスマスプレゼントの人形を見せに行き、泣いて帰ってきました。父親が失業中のその子にはプレゼントがなかったからです。それを知って非常に心を痛めたことを次のように後述しています。「私にとってとてもつらいクリスマスでした。クリスマスディナーの席に着きながらも、その食事を楽しむ気にはなれませんでした。なぜなら、ステーク部長としてステーク部内の人々の状況に熟知していなかったと気づいたからです。」

私たちは次のクリスマスにはよく準備をしました。調査の結果、この困難な経済状態のため、1,000人以上の人が助けを必要としていることがわかりました。そこで、おもちゃを古い倉庫に集めることから始めました。それか



ら、両親が倉庫に来ておもちゃを修繕したり、組み立てたり、人形の服を作ったり、織い物をしたりしました。

オレンジやりんごもありました。クリスマスディナー用のローストビーフと付け合わせも準備されました。監督は助けの必要な家族すべてにこれらを届けるよう手配し、その後で任務の完了を私に報告してくれました。

その年はクリスマスのディナーを心から楽しむことができました。それは、私の知るかぎりステーク部内のすべての家族がよいクリスマスを迎えていたからです。」

個人への心配りは、もちろん自分の家族へも及びました。娘たちにとってリー大管長は、音楽のけいこやパーティー、教会の活動への送り迎えをどんなときもいとわない、愛情深いやさしい父親でした。また夫としても非常に思いやりと愛に満ちた人でした。後に教会員に説いた、「主の仕事の中で最も大切なのは、あなたの家の囲いの中で行なう仕事である」という原則を実践した人でもありました。

その一例として、リー長老が祖父であり、十二使徒定員会の会員だった時の出来事を紹介しましょう。娘のヘレンは扶助協会の集会に出席するため母親にふたりの幼い息子の世話を頼んでありました。ところが、母親が病気になったため集会には出席せずに家にいることにしたのです。その日の朝、父親がオフィスから電話してきました。

大恐慌が始まった時、リーステーク部長の管理するステーク部の半数以上の会員が失業していた。靈感によって彼はある計画を立てた。倉庫が提供され、余剰品がそこに集められた。

「子供たちの世話は私がするから、おまえは集会に行きなさい」と言うのです。ヘレンは、教会幹部としての大事な仕事を差し置いて、父親に子供の世話はさせられないと言い張りしましたが、リー長老はこう答えました。「教会本部ビルで自分の机の前に座っているのと、母親が扶助協会に出ている間ふたりのかわいい孫の世話をすると、どちらの方がより大事な主のみ業と言えるかね。」結局ヘレンは集会に出席しました。

ステーク部長になって5年たった1935年4月20日、リーステーク部長は大管長会の事務局に呼ばれ、教会の新しい福祉計画を担当するよう依頼され

ました。彼はこの責任の重大さに非常に謙遜になるとともに、力不足を痛感させられました。そこで、いつものように祈りによって主の助けを願ったのです。

「私はひざまずいて、熱心に祈りました。『大管長会から与えられた責任を果たすために、どのような種類の組織を作ったらよいでしょうか。』そして、私はこの美しい朝、神権の権能の重大さを認識する機会を得たのです。何か次のような言葉が私の耳元でささやかれたように感じました。『教会員の必要を満たすために、何ら新しい組織を作る必要はない。ただ神権の権能を完全に働かせるだけでよい。これ以

外に何も必要ない。』」

彼は、市の委員会の職を退き、神の王国のためフルタイムの奉仕の人生を歩み始めました。以来、神が導いてくださること、神権組織の中に教会の成長に伴うすべての試練への答えがあることへの確信を揺るがしたことは一度もありませんでした。

若き十二使徒

1941年4月6日、ハロルド・B・リーは42歳の若さで十二使徒定員会の会員に召されました。定員会の中の次に若い会員でさえ20歳も年上でした。その朝の総大会でこう述べています。「昨晚の9時からずっと、これまでの人生を振り返るとともに、今後のことについても考えてみました。……この予想もしなかった、魂を揺さぶられるような召しについて一睡もせずと考えていた時、使徒パウロの言葉が繰り返し心に浮かびました。『だから、わたしたちは、あわれみを受け、また、恵みにあずかって時機を得た助けを受けるために、はばかりことなく恵みの御座に近づこうではないか。』(ヘブル4:16)……私はこの使徒パウロの言葉を受け入れることにしました。すなわち、私は助けが必要なときに恵みのみ座にはばかりことなく近づき、憐れみと恵みを願うことにしたのです。このような助けがあれば、私でも責任を果たせないわけがありません。またそ

の助けなしに成し遂げることは不可能なのです。』

その後の30年間、リー長老は多くの任務を果たしました。第二次世界大戦中の兵士を激励し、教会の青少年と語り合い、さまざまな神権委員会で奉仕しました。ステーク部を分割し、ステーク部長、監督、宣教師を召して任命しました。福祉プログラムを引き続き監督し、初等協会のアドバイザーとして働き、またラテンアメリカ、南太平洋、南アフリカ、ヨーロッパ、そして聖地を訪れました。

ヒーバー・J・グラント大管長によって十二使徒定員会に召された時、60万人の教会員のほとんどはアメリカ合衆国西部に住んでいました。ヒーバー・J・グラント、ジョージ・アルバート・スミス、デビッド・O・マッケイの各大管長の時代を経て、教会員数が300万人以上に増える中、リー長老は合衆国南部とイギリスでの最初のステーク部の設立と、アイダホフォールズ、スイス、ロンドンの3つの神殿の献堂に尽力しました。こうした長年の奉仕により、リー長老は忍耐と、体の不調を押して働き続けることと、世界じゅうの聖徒たちに愛と慰めを与えることを学び、一層その特質を研ぎ澄ましていきました。

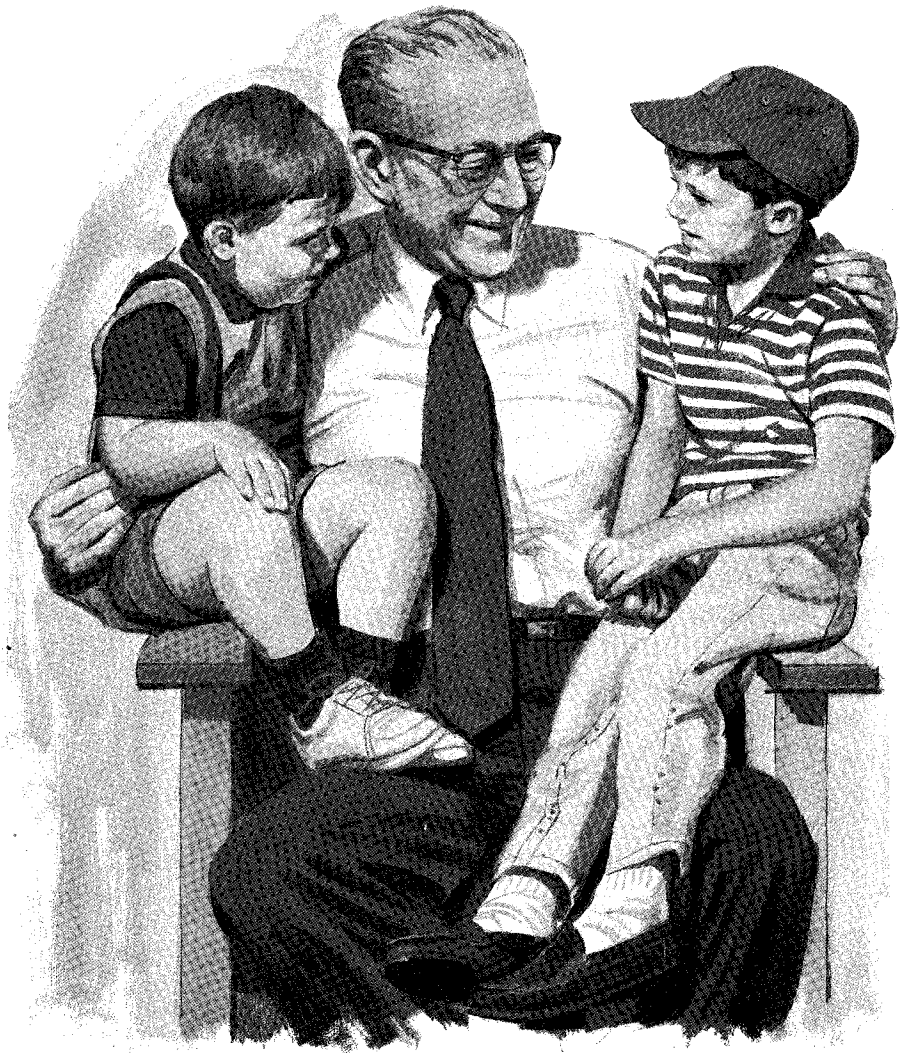
主への大いなる信仰

人生最大の試練は、1960年代初めに

相次いで起こりました。1962年、妻フアンが重病に倒れ、帰らぬ人となりました。そのわずか4年後、リー長老がハワイの大会に出席中に長女のモリーが4人の幼い子供を残して突然この世を去りました。このふたつの経験によりリー長老は深い悲しみのふちに沈みました。そんな中であって、主への大いなる信仰だけが前進する力を与えてくれたのです。

後年、ベトナム戦争で戦死した末日聖徒のための慰霊式典に出席したリー長老は、こう言って遺族を慰めました。「愛する者を失うという同じ経験をした者として、悲嘆に暮れる遺族の皆さんに個人的な経験からこう申しあげます。どうぞあまり先々を案じながら生活なさらないでください。大切なことは悲劇や悲しみが起こることではなく、どうそれに対処するかにあります。愛する者の死ほどつらく厳しい試練はありません。しかし、その悲しみを克服できれば、そして神を信頼するならば、直面するほかのどんな困難にも打ち勝てるようになるでしょう。……信仰こそが人生の厳しい試練から皆さんを導き出し、用意されている栄光に満ちた将来に向かう道を示してくれるのです。」

リー長老はその後、教育者であり行政官でもあったフレダ・ジョアン・ジェンセンと再婚しました。それからの10年間、夫妻はともに多くの地を旅し、また試練を分かち合いましたが、人を、



特に子供を魅了するフレダ姉妹の才能にリー長老は驚きました。

デビッド・O・マッケイ大管長の時代に教会のコーリレーション委員会が設置されました。リー長老は同委員会の委員長として、教会のすべての補助組織とそのテキスト類、そして指導方法を調査して、簡素化し、神権を教会組織の中心とするための提案をする、という責任を与えられました。

1970年1月、マッケイ大管長の死去に伴い、ジョセフ・フィールディング・スミス長老が第10代大管長になりました。ハロルド・B・リー長老とネーサン・エルドン・タナー長老が副管長として召されました。リー副管長は十二使徒定員会の会長の職も兼任しました。大管長会の一員として、引き続き教会のプログラムをさらに効率よく運営するための相互調整に取り組みました。また、教会の広報部が設置され、従来の刊行物に代わる新しい教会の機関誌が発行される運びとなりました。リー副管長はまた、イギリスで開催された最初の地域大会にも出席しています。アメリカ合衆国外に教会幹部が出かけて行ってソルトレークシティの定期総大会に似た大会を開く、というこの画期的なプログラムは聖徒たちを強め、教会幹部とじかに接するという貴重な機会を与えることになりました。また、オグデンとプロボでは、新たに神殿が献堂されました。

リー大管長は自分の説いた、「主の仕事の中で最も大切なのは、あなたの家の囲いの中で行なう仕事である」という原則に従って生きた。

精力的な大管長会

1972年7月2日、ジョセフ・フィールディング・スミス大管長が静かに息を引き取りました。そしてハロルド・B・リー長老が大管長に就任しました。この日に備えるために彼は、さまざまな試練を通してその人格を研ぎ澄まされてきました。その経験が熟して実を結ぶ時が訪れたのです。リー大管長はよく、この教会の頭はイエス・キリストであって、自分は主の僕のひとりであると言っていました。自分が深く関与した多くの画期的な変革や革新の功を誇ったりはせず、それらは天よりの啓示によるものだと言っていました。

ハロルド・B・リー長老が大管長の職にあったのはわずか18カ月でした。しかし、その間の精力的な活動ぶりはその全生涯を象徴するものでした。まるで必要なすべてを成し遂げるために全力で疾走し、駆け回っているかのようでした。メキシコシティとドイツのミュンヘンでも地域大会を実現させました。また聖地を訪れ、ペテロ以来最初の大管長としてかの地を歩きました。世界じゅうに小さな神殿を建設する計画が立てられ、ブラジルにそのような神殿を建設するための調査が始められました。

リー大管長はなるべく聖徒たちと交わるように心がけていました。特に教会の青少年を心にかけ、青少年のグル

ープとはあらゆる機会を捕らえて接するようにしていました。また、家庭の夕べを強調することで家族を強めることにも尽力しました。そして神権の管理の下に青少年のプログラムを再組織し、「この世代のために、救い主の再臨に備えられるプログラムを提供するように」指導者にチャレンジしたのです。

教会内外で多くの人々が、リー大管長の管理と指導の能力を認め、称賛しました。しかし、本当にみたまを感じることができる人だけがその比類ない霊性を知っていました。生涯の経験を通してリー大管長は、幕の向こう側には自分に心をかけてくださるお方がいらっしゃることを知っていました。大管長の祈りを聞いた多くの人々は、まるで本当に信頼している親しい友人と心の通った会話をしているようだったと証言しています。

1973年12月26日、ハロルド・B・リー大管長は74歳で急死し、大管長として長期にわたって教会を率いてくれるものと信じていた教会員は大きな悲しみに包まれました。以前大管長は成功の秘訣を次のように語ったことがあります。「状況を研究し、解決策を探し求め、そしてその実現に全力を傾けること。そして、そのすべての過程で慈愛に満ちた天父の導きと指示を、疑うことなく常に、そして永久に信頼し続けることです。」

勤勉と主への信仰、そして熱心な奉仕を通して、ハロルド・B・リー大管長はその願いどおり、主の矢筒の研ぎ澄まされた矢となることができたのです。□

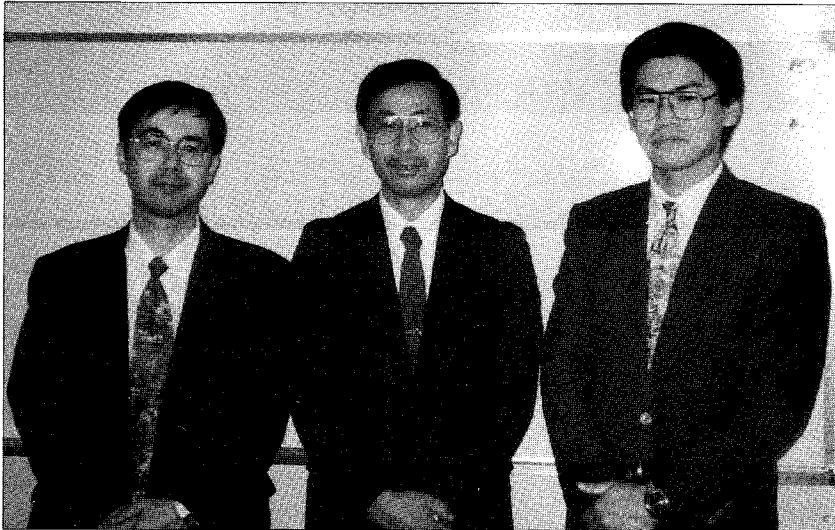
ハロルド・B・リー年表 1899—1973

年	年齢	出来事
1899	—	3月28日 アイダホ州クリフトンに生まれる。
1916	17	アイダホ州シルバースターで教鞭 ^{きょうべん} を執る。
1920—22	21—23	合衆国西部諸州で伝道する。
1923—28	24—29	ソルトレークシティで校長を務める。
1923	24	11月14日 ファーン・ルシンダ・タナーと結婚。
1930	31	ソルトレークパイオニアステーク部長に召される。
1932	32	ソルトレークシティ委員会の委員となる。
1937	38	教会保障(福祉)プログラムの実務部長となる。
1941	42	4月10日 十二使徒定員会に召される。
1954	55	アジアを訪れる。
1959	60	中央、南アフリカを訪問。
1961	62	中央神権委員会の会長としてコーリレーションプログラムを開発する。
1962	63	9月24日 妻ファーン死去。
1963	64	6月17日 フレダ・ジョアン・ジェンセンと結婚。
1970	71	1月23日 十二使徒定員会会長ならびにジョセフ・フィールディング・スミス大管長の第一副管長となる。
1972	73	教会最初の地域大会(イギリス)で説教する。 オグデン、プロボの両神殿の献堂式に参加。 7月7日 大管長として聖任される。 10月6日 大管長として支持される。 メキシコ地域大会を管理する。 MIAのプログラムが直接神権指導者の管理下に移される。
1973	74	ドイツ地域大会を管理する。 12月26日 ソルトレークシティにて死去。

参考文献

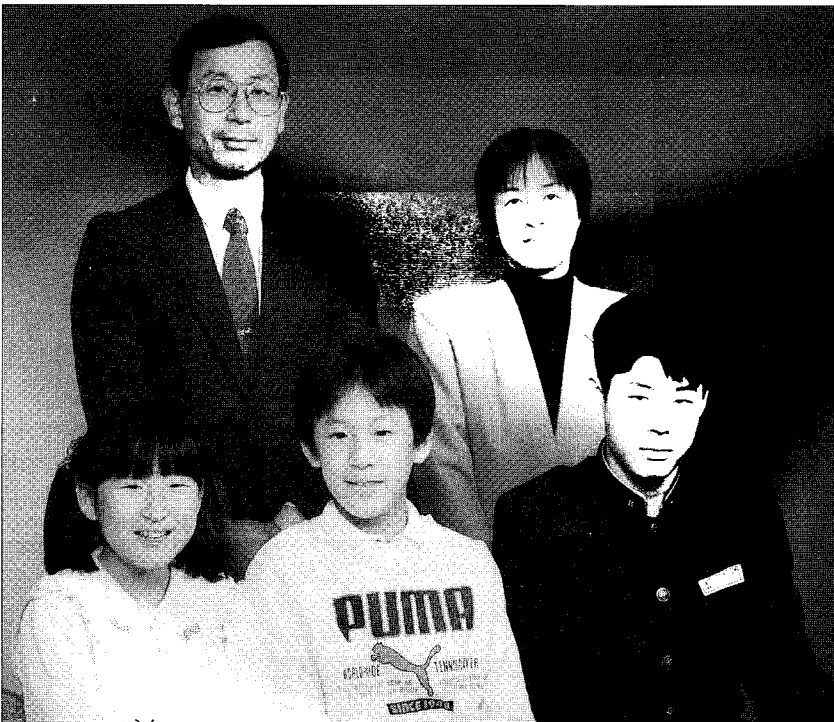
1. レナード・J・アリントン「ハロルド・B・リー」「教会の大管長」レナード・J・アリントン編
2. L・ブレント・ゴーツ「ハロルド・B・リー——予言者・先見者」
3. 「ハロルド・B・リー」「神の王国を出て行かせたまえ——教会歴史用資料」pp. 143—151
4. ゴードン・B・ヒンクレー「ハロルド・B・リー大管長」「エンサイン」1972年11月号

再組織された新潟地方部長会



昨年10月24日、東京北伝道部の熊沢幸雄伝道部長管理の下に開催された新潟地方部大会で、1991年10月より地方部長の責任を果たしてこられた吉田博兄弟が解任され、新たに堀井哲二兄弟(写真中央)が召されました。第一副地方部長には、大関洋一兄弟(写真左)が、第二副地方部長には、赤沢良一兄弟(写真右)が召され、その任に当たります。

堀井哲二地方部長ご家族



従順により得た多くの祝福

東京北伝道部新潟地方部長
堀井哲二

昭和47年8月、高校生活最後の夏休みに、教会員の兄に何の説明もなく連れられて行った所が、長岡にある教会でした。古い家屋の中は暗く、ひょっこり顔を出したのが外人でびっくりしたのを覚えています。それから毎日曜日、故郷の柏崎から片道2時間かけて福音を学ぶために教会へと通いました。

同居していた祖母は信仰のあついで、その影響もあってか、10歳のころには仏壇の前で一生懸命祈ったりしておりました。そのためか、宣教師から教わるジョセフ・スミスの経験や人生の目的などの福音を、それほど疑念を抱くこともなく聞くことができました。10月29日、私は、波が押し寄せる日本海でバプテスマを受けました。

当時、キンボール大管長は「すべてのふさわしい若人は伝道に出るべきである」と言われました。私はこの勧告により昭和50年3月から福岡伝道部で伝道する機会に恵まれました。この期間、多くの人々に証を伝える機会があ

堀井哲二地方部長の紹介

1954年新潟県柏崎市生まれ。17歳でバプテスマを受け、1975年から1977年まで福岡伝道部で専任宣教師として働く。1978年、五十嵐幸枝姉妹とハワイ神殿で結婚。現在、夫と男の子ふたり、女の子ひとりの5人家族。これまで長岡支部長、新潟地方部長を歴任している。

り、そのたびに心に温かい気持ちを感じ、証をすることが喜びでした。

伝道後、「帰還宣教師は早く神殿結婚すべきである」という指導者の言葉に従い熱心に伴侶を探しました。ちょうど東京から長岡に戻った五十嵐幸枝姉妹と出会い、準備して1年後に結婚しました。結婚に当たっては長岡支部の教会員をはじめおおぜいの人たちが援助してくださりました。そして、5カ月後ハワイ神殿で結び固めを受けました。結婚当初は6畳1間のアパートで何もなしところからのスタートでしたが、喜びと希望に満ちていました。それから15年の月日がたち、現在では3人の子供にも恵まれています。

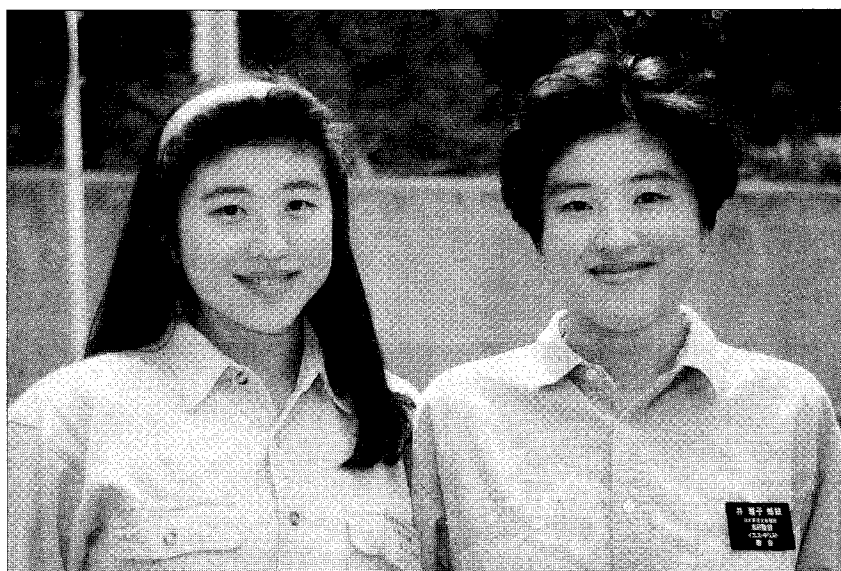
これまでの信仰生活を振り返りますと、劇的なこともなければ、大きな奇跡を見ることもありませんでしたが、「癒されるための骨折りといえば、ただ目を向けて見るだけのことであった」(Iニーフアイ17:41)という聖句のように、私もただ神権指導者の勧告に素直に聞き従っただけでした。しかし、私はその生活の中で神の愛を味わい、喜びを得ました。また、イエスが生きておられ、私たちに導きを与え、関心を払ってくださっていることを証できるようになりました。

冷戦時代の終結とともにキンボール大管長がおっしゃっていた「歩みを速めよ」という勧告がいつそう強調されつつあります。新潟県でも環日本海時代の拠点都市として中国、ロシア、モンゴルとの交流を深めています。これからは新潟を経由して日本の若い宣教師たちがこれらの国々へ神のみ言葉を携えて出ていくことでありましょう。そのためにも新潟地方部をシオンとし、主の計画を担える所として発展させていきたいと思っています。

副地方部長として私を支えてくださる大関洋一兄弟、赤沢良一兄弟をはじめ、まじめで誠実な信仰生活を送り、模範と援助を与えてくださる地方部の会員一人一人に心から感謝しております。また、愛する妻や子供たちもいろいろな面で協力してくれますことに、感謝しております。この教会が真実まことの教会であることを証いたします。(ほりい・てつじ)

ともに伝道に召されて

昨年4月、双子の姉妹が専任宣教師として伝道に召されました。それぞれの伝道地からのふたりの証です。



宣教師訓練センター(JMTC)での井優子姉妹(左)と雅子姉妹(右)

「ふたりはひとりに まさる。」(伝道4:9)

札幌伝道部専任宣教師
井 優子

私の家族は両親と兄がふたり、双子の妹との6人家族です。天父が妹と一緒にこの家族へ送ってくださったことを心から感謝しています。家族の中でほとんどの場合、私と妹は協力してきました。両親に願ひ事をするとき、しかられるとき、兄弟げんかのときも持ちつ持たれつ、お互いに加勢をしてきました。「ふたりはひとりにまさる。彼らはその労苦によって良い報いを得るからである。」(伝道4:

9)この言葉どおりのことは何回もありません。

私たちがこの教会を知ったのは、いちばん上の兄がきっかけでした。東京にいた時に改宗した兄は、熊本に戻って、中学生だった私たちを青少年の活動に誘ってくれました。すごく楽しくて、とても温かい気持ちを感じました。いつも一歩決断の早い妹は、すぐバプテスマを受けることを考えていました。それから約1年後にふたりでバプテスマを受けるまで、妹の固い決心に私も励まされました。バプテスマを受けて1週間のうちに、私は、いつものように出されたお茶をなんの抵抗もなく飲んでしまいました。隣に座っていた妹は私をつついて、こっそり、「優子、お茶はだめ。」私はとてもショックを



岩見沢で。同僚の常盤
姉妹と井優子姉妹

受けましたが、それからは戒めをいつも心に留めることができるようになりました。

私にとって妹は祝福です。ずっと同じ学校、同じ職場にいました。同じ病院に勤め、同じ医療事務の仕事をしました。兵庫県で就職してからの3年間、病院が借りていたアパートにふたりで暮らしました。そのような中でも、お互いに相手の行なうことや、小さい目標などはあまり気にかけていなかったと思います。伝道に行く決心も話し合ったわけではなく、別々に決めたものでしたが、同じ目標を持てたことは本当に助けになりました。

天父は愛する子供たち一人一人をよくご存じで、その人にとっていちばんいい、ぴったり合う家族に送ってくださいます。「あなたがたは、それぞれ賜物をいただいているのだから、神のさまざまな恵みの良き管理人として、それをお互いのために役立てるべきである。」(1ペテロ4:10)

昨年4月、妹は東京北伝道部で奉仕するために、私は札幌伝道部で奉仕するために、宣教師訓練センターに入所しました。今、宣教師として同僚とともに働く機会を感謝しています。学び、成長するたくさんの機会を感謝しています。生まれてからずっと一緒に生活していた妹と離れて、初めて会う姉妹と同僚として生活し、働く中で、たくさんの事柄に気づかされ、学んでいます。もちろん同僚たちは、ふたり一緒の私ではなく、私だけを知っているわけです。私自身、自分はどういう人か、どうしたらいいかわからなくなったこともありました。私の未熟さのために

何度同僚に迷惑をかけたかわかりません。でも、彼女たちの忍耐や愛、働き模範を見ていくときに、少しずつわかってきたことがあります。

そのひとつは、気持ちを言葉で伝え、行動で示すことの大切さです。トーマス・S・モンソン副管長が総大会の説教の中で引用された詩がありますが、まさにそのとおりです。

「鐘は鳴らさなければ鐘ではない。

歌は歌わなければ歌ではない。

愛もまた、人に与えるまで愛ではない。

愛は心に秘めておくために与えられたのではないのだから。」(『贈り物』「聖徒の道」1993年7月号、p.64)

同僚の姉妹の一人一人に心から感謝しています。

もうひとつわかったことは、伝道のみ業の神聖さです。ふたつ目の任地であるこの岩見沢に来てから、ひとりの女の子に会いました。その時、彼女はすでに宣教師から福音についてひととおりの話を聞いており、後は面接とバプテスマを受けるだけでした。彼女は神様の戒めを守りたいと純粋に思っていましたし、聖霊を感じていました。しかし、家族にバプテスマについて話さなければならないことや教会員としての生活を生涯続けられるかということなど、さまざまな不安のためにそこで立ち止まっていたのです。私たちも彼女のために何をすべきか、何が足りないのか、一生懸命考え、祈りました。

そのような状態で迎えたあるレッスンの時、会員の姉妹の助けもあり、4人でともに断食をして祈ることにしました。断食の後、彼女の祈りは変わっていました。バプテスマを受ける固い

決意とともに、家族も福音を受け入れ、バプテスマを受けることができるようにと祈っていました。

彼女はバプテスマを受けました。そして、バプテスマ会に出席した彼女の妹も、その約1カ月後にバプテスマを受けたのです。ふたりはともに主の道を歩み始めました。私たちは信じられないほどうれしい気持ちに満たされ、心から天父に感謝しました。

天のお父様は本当に生きておられます。伝道は主のみ業です。北海道のきれいな自然を見るとき、創造主イエス・キリストに感謝する気持ちでいっぱいになります。伝道できる機会を感謝しています。伝道に出ることを理解し、いつも励まし、助け、支えてくれる家族に心から感謝しています。天父の計画は本当にすばらしい真理であることを知っています。この末日聖徒イエス・キリスト教会が回復された真実の教会であることを心から証いたします。(い・ゆうこ 神戸ステーク部明石ワード部出身)

はらから 真理を同胞に 伝えるために

東京北伝道部専任宣教師
井 雅子

兄の紹介で私は14歳の時に教会を知り、バプテスマを受けました。その時から宣教師になりたいと思っていたように思います。私は今の家族の元に生まれ、福音を聞く機会が与えられたことに心から感謝しています。神様はこれまでいつも家族を通して私を愛し、助け、道を備えてくださいました。

高校を卒業し、熊本の実家を離れて姉とともに兵庫県の明石で就職してから、私は伝道について真剣に考えるようになりました。インスティテュートや帰還宣教師のかたがたの話を聞き、伝道はすばらしい経験であり、大切なことであると思いました。そして心の



伝道中の井雅子姉妹

中でいつも伝道に出ることを仮定して、さまざまな事柄を考えていました。でも伝道の業に出るのが正しいと知りながら、一方では、ほかにもっと必要なことがあるのではないかと、社会的な面で何かしたいなど、いろいろな思いが浮かび、決心がつかずにいました。

そのように考えていたある時、モルモン経を読みました。アンモンの伝道と成功、喜びの箇所でした。

「私たちの同胞のレーマン人は暗黒の^{ありさま}有様に在った。しかも最も暗い淵に沈んでいた。しかし、今は神の驚嘆すべき光を受けている者がいかにも多いではないか。……

私たちがもしもゼラヘムラの地からここに来なかったならば、私たちが心から愛し、また私たちが本当に愛しているこの同胞は、今でもやはり私たちに対し憎しみを抱いて苦しみを与え、また神を知らなかったであろう。」(アルマ26：3、9)

この言葉は神様からの言葉でした。

私が愛するはずの同胞で、「暗黒の有様に在り」「暗い淵に沈んでい」る人は「いかにも多」く、その人々は「神を知らな」い……。その時、私は神様の存在と救いの計画を知り、福音の中であって平安と喜びが与えられていることに改めて気づき、心から感謝する気持ちに満たされました。

そして神様がすべての人を愛しておられ、私に伝道に行くことを期待されているのを感じました。神様がそのことを教えてくださったことに、今本当

に感謝しています。また、神様はすべての面で道を備えてくださっていました。

まず、両親の理解と許可を得るために家に帰り、父に直接話す機会を探しました。両親は仕事が終わると毎日ウォーキングに行っていると言うので、その時に両親と3人で話すようにしました。とても緊張して、何かひと言は反対の言葉があるだろうと思っていました。そして父に21歳になったらすぐ伝道に行きたいことを話しました。父は反対も心配もせずに、それなら早く職場の方に言った方がいい、とだけ言ってくれました。まったくの予想外の返事で、信じられませんでした。

その後、心配していた退職も心配に及ばず、すべてがスムーズで、私の召しは初めから決まっていたように思えました。

今、伝道地に召され約10カ月になりますが、私のように弱い者を使ってくださいることに、へりくだって心から感謝しています。

毎日のように戸別訪問や街頭伝道をしますが、先日も、ある方に福音をお伝えした後、その日の伝道活動を終える夜9時までに1時間あったので、戸別訪問をすることにしました。祈って始めましたが、私と同僚の姉妹は疲れていたせいか、熱心がなく、時間がたつのを待っていました。その時、祈りたい、祈った方がいいという気持ちになり、残り15分でしたが、その15分の間に福音を待つ人と会えるように、

また私たちが伝道に集中できるように祈りました。

すると本当に不思議でしたが、疲れを忘れ、私たちは必ず福音を待つ人に会えると感じました。喜びに満ち、同僚との一致を感じて、再び戸別訪問を続けました。1軒1軒が待ち遠しく、次の人か次の人かと胸がわくわくしました。

後5分ほどの時、ある戸口で末日聖徒イエス・キリスト教会の宣教師であることを、いつもの訪問と同じように言いました。すると若い奥さんがドアを開けてくださいました。彼女はすぐに興味を持ち、モルモンについて聞いたかったと言われたので、私たちは福音のメッセージやモルモン経の紹介をしました。そして続けて福音を紹介する約束をし、今福音を伝えています。

小さな経験でしたが、祈りを通して、彼女に導かれたことで、伝道が主のみ業である証となりました。伝道がすべてをつかさどる主のみ業であって、神様のご計画を成就するための神聖な働きであることを証します。その神聖な働きに仕える者として召され、家族に助けられて召しを果たせることに心から感謝しています。

伝道は簡単でも楽でもありませんが、私たちが信仰を持って、求めて働くときに、神様は私たちを導いて、み業を行なわれます。このみ業に宣教師として携われることは、本当に大きな祝福と喜びで、特権だと感じています。

神様は天の父であり、確かに実在のお方であること、イエス・キリストは人類のために贖いの業をしてくださった救い主であり、復活されたことを心から証します。末日聖徒イエス・キリスト教会はジョセフ・スミスを通して回復された真実の教会であることを証します。

人々に証を伝えるとき、伝道するとき、また祈るときに証が強められています。この何にも代えられない証と経験に心から感謝しています。これからも、神様をまだ知らない、この地に住む同胞である人々に真理を伝えるために一生懸命働きたいと思っています。(い・まさこ 神戸ステーキ部明石ワード部出身)

音楽による感動と祝福

——主に導かれた東京北ステーク部大会と文化祭——

東京北ステーク部の聖徒たちにとって、昨年10月24日のステーク部大会と、11月3日のステーク部文化祭は、まさに音楽による感動と祝福の時でした。

教会幹部を迎えて行なわれるステーク部大会に備えて、ステーク部聖歌隊の選曲を検討していたところ、ひとりの高等評議員からヘンデルの「メサイヤ」の中から『ハレルヤ・コーラス』をやろうと提案がありました。早速、指揮者の兄弟とも相談し、むずかしい曲だけでもチャレンジしようと決断しました。

6月27日の第1回練習日に、楽譜とタバナクル合唱団が歌ったテープを各ワード部に配付。各ワード部で週1回、ステーク部で月1回の合同練習がスタートしました。しかし、この曲は一般の賛美歌と違って、音取り、高音部の高さ、各パートの掛け合いのタイミングなど、大変むずかしいため、容易に進みません。伴奏もパート別であれば弾け

ても、全パートを合わせると大変です。

8月に入って伴奏者を探していたところ、ちょうどアメリカから浦和ワード部に来ていたドネッタ・ラスマセン姉妹にお願いしてみると、快く引き受けてくださいました。後日わかったことですが、彼女はピアノ科の卒業演奏で、なんと『ハレルヤ・コーラス』を弾いたとのこと。2、3年前に福岡伝道部で専任宣教師として働き、最近になって日本にまた来たくなくて、偶然浦和に来ていたのです。驚きとともに、神様の導きに心から感謝しました。彼女のおかげで前途が開け、しかもメロディーに合わせて、英語の歌詞の発音まで正確に指導していただきました。

ところで、もうひとつのコーラスを川越ワード部をお願いしていましたが、『ハレルヤ・コーラス』があまりにむずかしいため、ワード部聖歌隊までとはとても無理ということになり、代わりに若い男性、女性による青少年のコー

ラスになりました。曲は西堀まなみ姉妹作詞・作曲、若い女性編曲の『それぞれの予言者によって』をやりたいとの希望が出されました。歌ってみるとなかなか良い曲で、以前からステーク部大会で青少年のコーラスをやってみたくて思っていましたので、これは良い機会であると歓迎しました。

後日ステーク部大会に来られる教会幹部が、管理監督会のH・デビッド・バートン第一副監督とわかり驚きました。管理監督会は青少年と深いかわりがあるからです。青少年は毎週練習し、できるかぎり歌詞を暗記するよう頑張りました。

さて、いよいよステーク部大会当日を迎えました。まずバートン長老ご夫妻を歓迎する意味で、入場時に川越ワード部の約30人から成る青少年コーラス隊が、大きな声で美しく歌いました。開会、ビジネス後に、ステーク部聖歌隊が『ハレルヤ・コーラス』を歌いました。大会は終始みたまに満ちており、バートン長老ご夫妻は、お話の中で、ふたつのコーラスが大変すばらしく、感動したとおっしゃっていました。バートン長老は、かつて『ハレルヤ・コーラス』を歌ったことがあり、この曲のむずかしさをよく知っていると話されました。訪問された教会幹部が『ハレルヤ・コーラス』を歌ったことがあると聞き私たちは驚き、主の導きに心より感謝しました。

そして閉会后、バートン長老ご夫妻が退場されるのに合わせて、ステーク部聖歌隊が賛美歌85番『神よ、また逢うまで』を歌いました。バートン長老は涙を流しながら、聖歌隊の前を歩き、兄弟姉妹と握手をしつつ退場されました。神様の導きと恵みを感じ、本当に心に残る大会でした。

さて、大会の翌日にもまたすばらし



東京北ステーク部文化祭。左からラスマセン姉妹、ヴィンセント兄弟、杉田和子姉妹

福音を分かち合う備え

いことが待っていました。

東京東ステーク部の音楽担当の兄弟から、オーストリアのウィーン・フォルクスオーパー管弦楽団の日本公演で、テノール歌手のローレンス・ヴィンセント兄弟(ウィーン国際支部の支部長)が、10月29日から11月9日まで東京に滞在するとの連絡をいただきました。もし東京北ステーク部でファイヤサイドなどを計画されるならどうぞとのこと。ちょうど11月3日にステーク部文化祭があるので、それに特別ゲストとしてご招待しようと考え、ステーク部長会に連絡し、了解を得ました。

副ステーク部長が早速ヴィンセント兄弟と連絡を取った結果、快く承諾していただきました。ここで重要なのはやはり伴奏者です。ラスマセン姉妹にオペラの伴奏は経験があるかお尋ねしたところ、だいじょうぶとの返事をいただき、早速彼女とヴィンセント兄弟のリハーサルの日程と場所を電話で調整していただくことにしました。

結局10月31日に宿泊先のホテルでと、11月3日文化祭当日12時からの2回だけのリハーサルとなりました。ヴィンセント兄弟は、「これだけのリハーサルで合わせられるラスマセン姉妹は素晴らしい」と称賛していました。

文化祭は、ステーク部の会員の歌や楽器演奏、日本舞踊など大変素晴らしい内容でした。ヴィンセント兄弟は独唱を5曲、歌の間にお話と証をされました。さらに、賛美歌44番『わが主よ、わが神』を賛助出演の杉田和子姉妹と日本語でデュエット、最後は賛美歌85番『神よ、また逢うまで』を1、2番を日本語でデュエット、3番は出席者全員で立って歌い、そのまま閉会のお祈りで幕を閉じました。本当に感動と喜びのひとつときでした。

東京北ステーク部の会員、宣教師、求道者が一堂に会し、音楽により主を賛美し、出席者の心がひとつとなる素晴らしい機会でした。ステーク部大会と文化祭を通じて、主の導きと恵みをいただいたことに心から感謝いたします。(レポーター：吉田憲博 東京北ステーク部高等評議員)

福音を分かち合う備えとして、以下の点を心がけましょう。

●**定期的に神殿に参入する。**そうすれば、常にみたまに波長を合わせる事ができ、福音を分かち合う機会に備えられます。

●**毎日聖典を勉強する。**特にモルモン経を研究しましょう。モルモン経を紹介できるようになるためには、モルモン経をよく理解し、愛さなくてはなりません。プレゼントできるように1冊用意しておきましょう。

●**福音を実践し、よい模範となる。**人人は私たちの行ないを見ています。

●**無条件の愛を示し、決して人を裁かない。**主はその子らの心をよくご存じです。福音を分かち合えるようになるためには、人々を愛し、彼らの友とならなくてはなりません。

●**良きホームティーチャー、家庭訪問教師になる。**あまり活発でない会員や、その家族でまだ教会員になっていない人々に福音を分かち合う機会はいくらでもあります。過去2、3カ月の間に私たちのワード部でバプテスマを受けた人の多くは、あまり活発でない会員の家族でした。

●**ふだんの何げない会話の中で、私たちにあって福音がどんなに大切かを伝える。**

●**福音を分かち合える人を見つけられるよう、祈り求めるとともに、分かち合える機会に備える。**

●**福音を分かち合うようにというみたまを感じたらすぐに従う、という決心をする。**

オクラホマ州ポンカシティー
ブライアント・ハーディー、ステファニー・ハーディー

あら探しをしない

イエス・キリストの福音を実践して得られる最も大きな喜びのひとつは、福音を人々と分かち合うことでしょう。しかしそのためには、絶えず備えをしていなくてはなりません。この備えは、生涯継続して行なっていくものです。

そのような機会に備えるために、私たち一人一人にできる簡単な事柄がたくさんあります。

●**最も偉大な宣教師であったイエス・キリストから直接学びましょう。**そのためには、熱心な祈りと聖典を熟考することが大切です。また、聖典に記されている人々の経験からも、多くを学ぶことができます。

●**福音への愛、救い主への愛を伝えましょう。**人々に福音を宣べ伝える前に、このような模範を示すことが大切なのです。さらに私たち一人一人は、自分も含め、この地上に生を受けたすべての人々への愛をはぐくんでいかなければなりません。

●**福音を宣べ伝えたいと思っている人に対し、偏見のない態度で接しましょう。**裁くのは主にゆだねるのです。真理を分かち合う備えをするうえで、人のあら探しをしたり、その信条を批判するのは適切ではありません。そうではなく、福音の中から共有できる真理を強調するように努めましょう。

主の助けを求めましょう。そうすれば私たちは、神の子供としてよく備え、主とこの栄えある福音のために、いつでもどこにいても、何事についても、神の証し人として立つことができるでしょう。ノースダコタ州ウォーピトン
ジャナ・R・クルッケンバーク

をするには

勇気を持つ

福音を分かち合えるようになるためには、前もって計画しなくてはなりません。何を語るか考え、実際にそれを相手に伝える決心をしましょう。福音を分かち合う際に最もむずかしいことは、友達にもっと教会について知りたいかどうか勇気を出して尋ねることなのです。

テサロニケ人への第一の手紙第2章2節でパウロが語った言葉は励みになります。「わたしたちは……わたしたちの神に勇気を与えられて、……神の福音をあなたがたに語ったのである。」
モンタナ州コーバリス
ディーン・ジェイクス

人々への道しるべ

私たち家族が、福音を分かち合う機会に恵まれたのは、福音の原則に従って生活しようと努力していたときでした。息子は、日曜日に開かれる体操の競技会に参加しようとしませんでした。それがきっかけとなり、彼はコーチに

福音を伝え、バプテスマに導きました。短大に通いながら高い標準を保ち続けた娘は、大学の友達が改宗するうえで大切な役割を果たしました。今その人は伝道に出ています。夫は事業を営んでいますが、仕事に取り組む彼の誠実な態度が、ある従業員に影響を与えました。現在、その人は家族とともに神殿に参入する準備をしています。ある夫婦は幸せな私たち家族を見て、福音に関心を寄せるようになりました。私たちは今、彼らに教会について教えているところです。

自分たちが享受している真理に従順で忠実であれば、真理を求めている人々の道しるべになることができます。カリフォルニア州ストックトン
エレン・ウールズィー

和やかな雰囲気

私は夫とともに事業を営んでおり、教会員でない人がおおぜい訪れます。

ある日ひとりの女性が、「あなたがたはイエス・キリストを信じてはいない」と言いました。そしてとてもしんらつな言葉で、「あなたはモルモンの教えが何であるかわかってないのよ」と言ったのです。私は怒りを覚えました。このまま話を続けるわけにはいかない、ということはわかっていました。そこでこう言いました。「あなたがそんなふうにおっしゃるのは、わたしへの思いやりからなんですね。」それから和やかな雰囲気ですることができました。その時以来、彼女と会う機会はありませんでした。しかしこの経験を通じて、どんな状況にあっても愛を示すことはできると考えるようになりました。きっとあの話をしてから、彼女はモルモンに対して以前のような敵意を持つてはいないでしょう。

ワシントン州オティスオーチャード
エイダ・ロウ

地域活動

よく考えてみると、私の実行してい



ることで、福音を分かち合うのに役立つ事柄がいくつもあるのに気づきました。それは次のようなことです。

●研究と祈りを通して自分自身の宗教をよく理解できるように努める。もし話題になったことについて自分がよく知っていれば、もっと自信を持ち、率先して自分の信じることを分かち合えるでしょう。

●ほかの人々の宗教を理解できるように努力する。友達に尋ねたり、適切なものであれば彼らの宗教の行事や活動に出席してみるのもよいでしょう。この方法を通して、友達について、そしてなぜ彼らがそのような生き方をしていくかについて、もっとよくわかるようになります。ほかの人々の宗教を理解していれば、話しかけるきっかけにもなります。

●地域社会で活動する。そうすることにより、自分の宗教の枠を越えて人々と出会い、友情を築くことができます。

そして地域社会に奉仕できると同時に、行ないを通して自分の信仰と標準を分かち合うことができます。

マサチューセッツ州グランビー
ゲイル・デマリ

福音を实践する

福音を分かち合う備えとして最も良い方法のひとつは、どんなときもキリストの光をともし続けることです。また、いつも聖霊を感じられる状態を保ちましょう。そうすれば、機会が訪れたときに、このすばらしい福音は真実であると証できるような聖霊が助けられるでしょう。みたまを通してのみ、人々は福音が真実であることを学び、理解できるのです。

もちろん、特別な光をともしずには、自分たちが福音を完全に実践しなくてはなりません。つまり個人と家族の祈りを捧げ、毎日聖典を読み、教会の集じゆうふん会しゅうふんに出席し、神殿に参入し、什分の

一を納め、そして戒めを守ることです。我が家の冷蔵庫には次のようなメモがはってあります。「十戒には、守らなくてよい戒めなどひとつもない。」私たちが正しいことを行なっていれば、それが人々にキリストの光を分かち合う備えとなるでしょう。

ユタ州サンディー
メアリデル・レビット

まとめ

1. 神殿参入、祈り、聖典の勉強など、福音を实践することで模範を示す。
2. ほかの人々の信条や信仰について裁いたり、あら探しをしない。
3. 人々を愛する。福音を宣べ伝えたいと思っている人と友達になる。
4. 前もって計画する。みたまに波長を合わせるにより備える。

(「チャーチニュース」1992年12月12日付)

お知らせ

ローカル

福音の視覚資料セット 発売中

レッスンや個人の聖典学習に

皆さんの家庭やワード部、支部で行なわれるレッスンをさらに充実したものとするために新しい補助教材が発売されています。教会教科課程企画・調整部門の作成によるこの「福音の視覚資料セット」は、教会管理本部経理課を通じて購入できます。

このセットには、旧・新約聖書、モルモン経に登場する物語や出来事を描いた美しい色彩の絵が104枚収められています。それぞれの絵の裏面には、絵の簡単な説明文と参照聖句が記されています。絵は雑誌サイズで、繰り返し使用可能な材質になっています。さらにこのセットには、教会歴史に基づく場面や、よりすぐった神殿の写真、

そして歴代大管長の肖像画や写真も収められています。また、分類のための仕切り、セットの使用法と分類番号による索引を掲載した書面も入っています。教会員各自がほかの絵を追加し、分類整理して、セットの内容をより充実させることもできます。

セットは、保管に便利なようにふたのついた青いプラスチックケースに入ったもの(34730 300 価格2,200円)と、ビニールケースに入ったもの(34737 300 価格1,900円)の2種類があります。現在、各ワード部、支部に1組ずつ備えられ、利用できるようになっています。

教会教科課程企画・調整部門に所属するウェイン・リン兄弟は次のように

語っています。「みたまが最高の教師であることに変わりはありませんが、視覚教材を併用することによって、学習効果を高め、レッスンの質を向上させることができます。

福音を題材とするこの視覚資料セットは、全世界の末日聖徒の要望にこたえる補助教材として、教会幹部の指導の下で作成されました。

各ユニットの教会付属図書館にこの絵画セットを2組そろえるようお勧めします。1組は教会におけるレッスンで使用するため、もう1組はこのセットを購入していない会員に貸し出して、自宅で使用できるようにするために。」□

皆さんの原稿を
募集しています

役員の異動

1993年10月30日から1993年11月30日までに管理本部会員統計記録課に通知のあった役員の異動(敬称略)

- 仙台伝道部秋田地方部
新地方部長：佐藤祐輝
(前任者：佐々木利宏)
- 東京北伝道部新潟地方部
新地方部長：堀井哲二
(前任者：吉田博)
- 東京西ステーク部
新ステーク部長：宇田川精一郎
(前任者：品川文弘)
- 東京西ステーク部国立ワード部
新監督：佐藤 瓦

- (前任者：青木秀樹)
- 東京西ステーク部八王子第2ワード部
新監督：丸山幹夫
(前任者：岸野陽)
- 名古屋伝道部石川地方部野々市支部
新支部長：宮木徹
(前任者：武田昭一)
- 名古屋伝道部三重地方部松阪支部
新支部長：山下正弘
(前任者：山崎和男)

▶ ローカルページでは皆さんの原稿を募集しています。以下のような証をお送りください。

- ① どのようないきさつで改宗したか。
- ② 日々の生活に福音の原則をどのように応用しているか。またそれによってどのような祝福があったか。
- ③ 教会員として職場でどのような努力をしているか。また、信仰をどのように生かしているか。
- ④ 友人や周囲の人にどのように福音を伝えているか。
- ⑤ 伝道に出るに当たりどのように準備し、障害を克服したか。また、専任宣教師になって得た証。
- ⑥ 神殿参入や家族の記録を作成するに当たってどのような助けや祝福があったか。
- ⑦ 家庭の夕べの紹介。
- ⑧ その他。(家族の証、ワード部/支部特集など)

▶ 現在ローカルページでは証の著者の生年を記載しておりませんが、編集作業の参考のため、投稿の際には連絡先(住所、電話番号)、教会での責任(役職名)、所属ユニット名と併せて生年を記入し、写真を同封のうえお送りください。

▶ お送りいただいた原稿は一部手直しさせていただきますことがあります。また、掲載されるまでには若干時間がかかる場合もありますので、あらかじめご了承ください。

▶ あて先：〒106 東京都港区南麻布5-10-30 末日聖徒イエス・キリスト教会「聖徒の道」編集室
電話03(3440)2666
ファクシミリ03(3440)3275

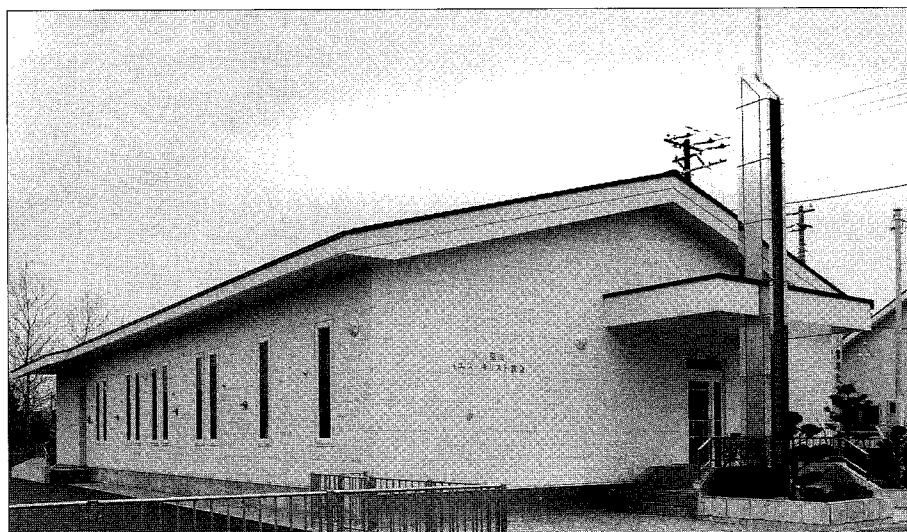


新教会堂の紹介

町田ステーキ部湘南ワード部

(1993年4月22日完成)

鉄骨造 2階建 建築面積：185.58㎡
延床面積：366.63㎡ 敷地面積：495.29㎡
住所：神奈川県平塚市東中原1丁目2-15
電話：0463-36-1173



札幌西ステーキ部 苫小牧支部

(1993年4月23日完成)

木造平家建
建築面積：294.13㎡
延床面積：283.60㎡
敷地面積：991.78㎡

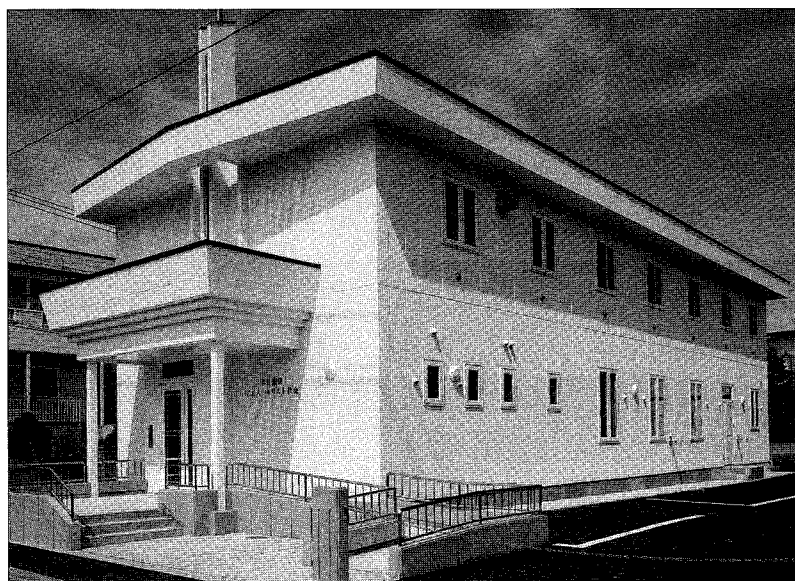
住所：北海道苫小牧市
三光町4丁目
22-1
電話：0144-35-1347

札幌ステーキ部 札幌東ワード部

(1993年5月19日完成)

鉄骨造 2階建
建築面積：191.55㎡
延床面積：359.06㎡
敷地面積：760.36㎡

住所：北海道札幌市
東区北25条東18
丁目7番7号
電話：011-785-9514



神権の祝福を完全に享受する

私 たち一人一人はみたまの賜と個人的な啓示を受けることができます。(教義と聖約88:63参照)しかし、救いにかかわる儀式とそのほかの神権の祝福は、神権を持つ人によって執行される必要があります。

神権の権能を通して、私たちは生ける予言者をはじめ、中央や地元の神権指導者から導きを受けることができます。また、悩み深きこの世にあって平安をもたらし、永遠の生命へと導いてくれる神権の儀式と祝福を受ける機会にあずかることができます。

扶助協会の目的のひとつは、「神権の祝福を完全に享受〔する〕」(「扶助協会手引き」p.1)方法を姉妹たちに教えることです。教会では、姉妹たちはバプテスマを施したり、聖任したり、輪になって神権の祝福を授けたりはしません。しかし、十二使徒評議員会の故ジョン・A・ウィットウォー長老はこのように述べています。「神権と神権を有することから来る祝福について、男性は女性よりも多くの祝福を要求できるわけではない。」

救いの祝福を求める

救いに必要な神権の祝福には、バプテスマ、確認、神殿のエンダウメント、日の光栄の結婚、結び固め、死者のためのバプテスマなどの儀式があります。これらの祝福はいずれも、もし私たちがこれらの祝福をじゅうぶんに享受しようとするならば、積極的にまた持続的に求めなければなりません。

多くの人にとって、求めることには



ILLUSTRATED BY SUE HANSEN

犠牲が伴います。チェコスロバキアのオルガ・コバローバ姉妹はこのように回想しています。「改宗した後、バプテスマを受けるために半年待たなくてはなりません。バプテスマフォントがなかったので、人目につかない森の中でバプテスマを受けられる時節、つまり夏まで待たなくてはならなかったのです。」バプテスマの晩、貯水池に到着すると、おおぜいの釣り人がいました。彼女はこのように語っています。「待っていましたが、時間だけがのろのろと過ぎていきます。」とうとうある兄弟が、お祈りをして天父に助けを求めようと提案しました。「これは、神権の祈りについて初めて経験した奇跡となりました。私たちが静かに祈ると、2、3分もしないうちに、川にいた釣り人はほとんど帰ってしまったのです。水の中から出てきた時の私の喜びがどんなに大きかったか想像できるでしょう。」こうして、コバローバ姉妹はチェコスロバキアでほぼ40年

ぶりの若い女性の改宗者となりました。彼女は確認の儀式を受けた際、彼女を通して「多くの人が教会に導かれる」と告げられました。

●救いの祝福にあずかるために、あなたはどのような努力をする必要があるでしょうか。

そのほかの神権の祝福を求める

孤独や失意のときにあつて、神権を通して受ける祝福と助言は平安と慰めをもたらします。病気のときには、情緒的、身体的な重荷を軽くしてくれます。祝福師の祝福は進むべき道と目的を与えてくれます。また、毎週聖餐にあずかるとき、救い主と交わした誓約を新たにすることができます。

中央扶助協会会長会のチエコ・N・岡崎姉妹はこのように語っています。「夫が亡くなった時、私は深い悲しみと苦痛の中にあつて慰めを求めていました。聖典を読んだり、自分の人生を振り返ってみたりしました。葬儀が終わった翌週の日曜日に教会へ行った時、聖餐の祈りにじっと耳を傾けていると、救い主のみたまが私とともにいてくださるのを非常にはっきり感じました。そして、主と交わした誓約を新たにすれば、常にみたまを伴侶とできるのだと実感したのです。単純なことでした。私は毎週このような神権の儀式にあずかり、慰めを受けられることに感謝しています。」

●今、どのような神権の祝福があなたに慰めをもたらしてくれるでしょうか。

□

愛のきずな

ホセ・ロベルト・アラルコン・ナバレッテ

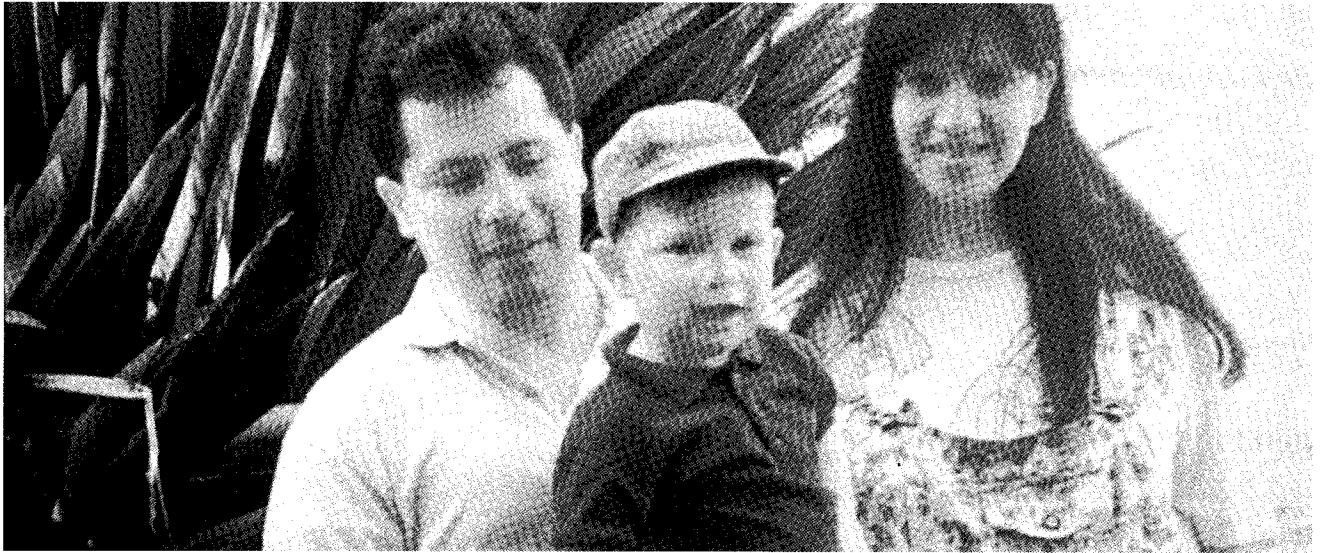
ここに紹介するのは、本当にあった出来事です。絵にかいたように美しい成功談ですが、取り立てて珍しい話ではないかもしれません。末日聖徒イエス・キリスト教会の会員がいる所なら、あちこちで何度も繰り返されていることだからです。

そのすばらしい出来事は、チリの中南部の町テムコで1985年から1991年の間に起こりました。それは、証を人々に分かち合おうと決心した、3人の若い男性の記録です。ひとりの心温まる改宗が、予期しなかった新たな改宗を次々と呼び起こしたのです。

ラハス出身のエラルド・トレスは、テムコにあるカトリック系大学のほとんどの学生たちと違って、末日聖徒でした。クラスメートたちは、彼が道徳的な問題に勇敢に自分の見解を述べるのをよく目にしました。それは必須科目の論理学のクラスでも同様に、自分

エラルド・トレス





子供をひざに乗せるルイス・コルネホと奥さんのマルタ

の意見が成績を下げる結果を招くこともありました。しかし、次第に彼は教授や学生たちから尊敬を得るようになりました。

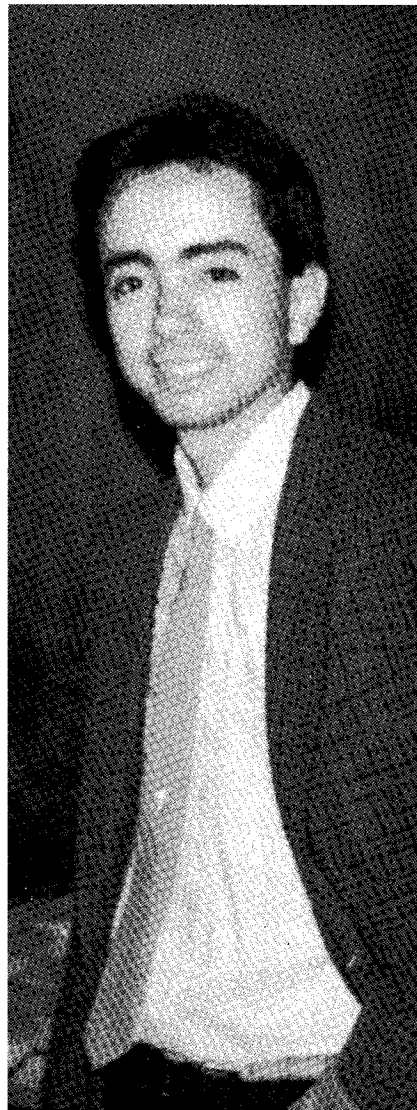
エラルドのルームメイトで、長年の友人であったロベルト・ヒメネスも教会員です。彼は伝道を終え、大学に復学したばかりでした。ほかの多くの改宗者と同様、彼は家族の中でただひとりの教会員でした。ロベルトが無事大学に戻れたことで、伝道のために学業を中断しないように忠告した多くの友人や親戚は一安心しました。

「君はいつ伝道に出るつもりだい。」ロベルトはときどきエラルドをからかいました。

「卒業したら、すぐさ。」それがいつもの返事でした。

「ということは10年後だな。」ロベルトがちゃかしたものです。

英語を専攻しているこのふたりのル



ロベルト・ヒメネス

ームメイトは、間もなく専攻を同じくするある若者と出会いました。この男性は首都サンティアゴ出身で、名前はルイス・コルネホです。(みんなはルチートと呼んでいました)彼は、引込み思案のように見えたが、ロベルトとエラルドの招待を受けワード部の集会とインスティテュートのクラスに出席し、福音の教義に賛同を覚えました。ちょうど、ルチートが末日聖徒の家庭であるエルナンデス家で下宿を始めたころでした。そして、家族の親切で思いやりのある態度に心を和らげ、バプテスマを受ける決心をしたのです。

ルチートは、たくさんの改宗の先駆けとなりました。この愛のきずなの物語の発端となったのです。故郷のサンティアゴに帰省した際、彼は母と妹に福音を学ぼう勧め、ふたりともがバプテスマを受けました。ルチートは同様に、別のクラスメイトであるルイ



ルイス・コルネホの母、カルメン・バルガス・ロドリゲスと、赤ちゃんを抱く妹のアレハンドラ

ス・ソトにも福音を紹介し、彼もまた、ルチートのようにバプテスマの水をくぐることになりました。

教会に入った時、ルイス・ソトはリチャード・スピチゲルと同じ下宿に住んでいました。リチャードはスイス移民の子孫で、自動車工学を学んでいました。リチャードはルイスの態度や行ないにとっても感心しました。ルイスを通して教会員に好意的な印象を持ったリチャードは、専任宣教師から福音を学ぶようになりました。この宣教師も

リチャードたちと同じ下宿に住んでいたのです。リチャードがバプテスマを受けた後、ルイスは、チリのオソルノ伝道部で働く召しを受けました。彼は、そこでも多くの人に次々とバプテスマを施していきました。

ルチートの話に戻りましょう。ルイス・ソトとリチャード・スピチゲルが教会に入る前、彼は別の友人でリアナ・サラサルという若い女性にも新たに得た証を分かち合っていました。エラルド、ロベルト、ルチート、ルイスと同様、リアナも英語を専攻してい



ギジェルモ・ロサレス

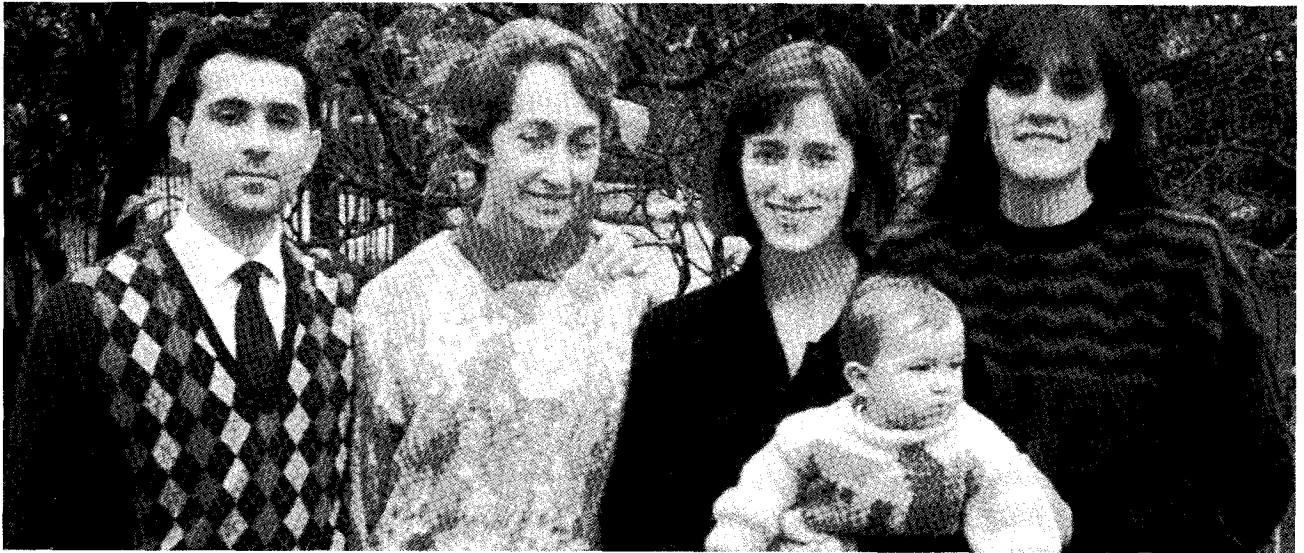
ました。彼女は、その年、クラスで一番の成績を取め、みんなの尊敬を得ていました。しかし、もっとすばらしいことは、彼女がルチートの生活の変化を目の当たりにして、彼の信条を学ぼうと思ったことです。数カ月後、リアナもまた末日聖徒になりました。それから、彼女の招待で、彼女の父、母、そして、妹のパトリシアが回復されたメッセージに耳を傾け、受け入れたのです。やがてリアナは、エラルドから数えて6人目の学生に当たる、友人ギジェルモ・ロサレスを教会に招き、彼も教会に加わりました。

教会での活動を通してリアナは、改宗して間もないネストル・ブラボと知り合いました。ふたりは、後に神殿で結婚することになりました。

教会に入るずっと以前に、ネストルは彼の専攻している舞台芸術の分野で成功を取めたいと強く望んでいました。



ルイス・ソトとその家族

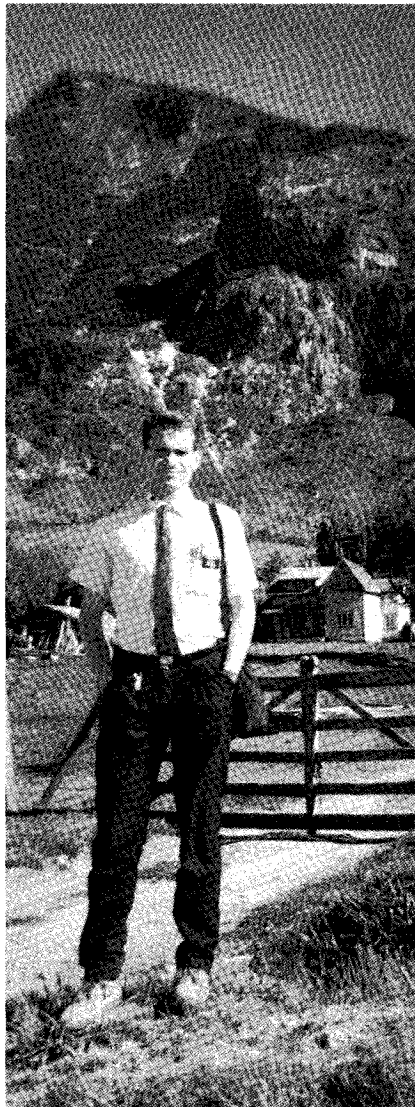


ネストル・ブラボ, ミルナ・サラサル, 赤ちゃんを抱くリリアナ・ブラボ, パトリシア・サラサル

彼は南部の町バルディピアで仕事を持っていました。大学生を対象とした劇団を作っていたのです。彼の改宗のきっかけは、熱心な教会員で獣医学を専攻する学生アレハンドロ・アラングアと知り合ったことです。美しい友情が芽生えるにつれ、ネストルはすぐに、この新しい友人はほかの若者とは違うと感じました。みたまに導かれ、アレハンドロは自分の証をネストルに伝えました。

ネストルがバプテスマを受けた後、ふたりは一緒にチリのセミナーやインスティテュートの生徒にパントマイムによる芝居を披露しながら、チリの町々を巡る旅行に出ました。彼らは、芝居に福音の原則を美しく芸術的に盛り込む方法を考え出しました。それに加えて、見に来る人々に、力強い証を述べました。

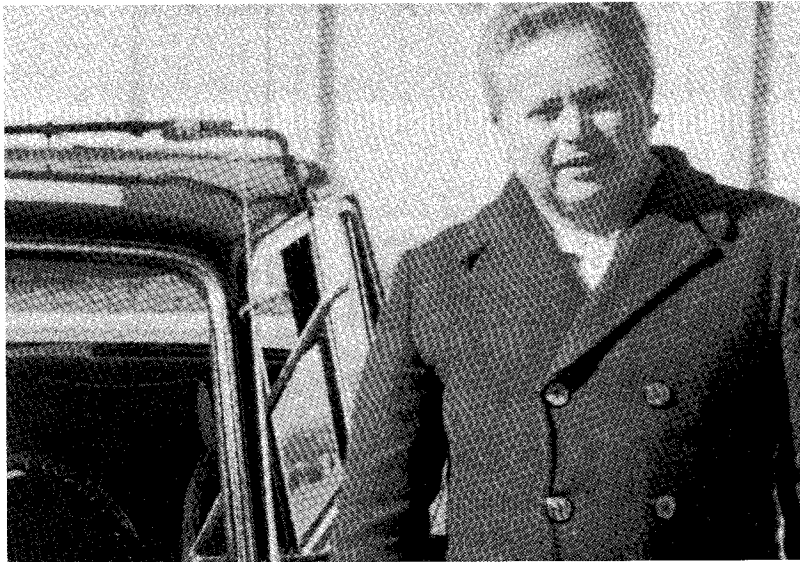
その後、アレハンドロは仕事に就く



リチャード・スピチゲル

ために遠くへ引っ越しました。ネストルはチリに残り、ステーキ部書記、また早朝セミナーの教師としての召しを果たしました。セミナーで彼は、ニーファイ、モルモン、アルマ、そしてイエス・キリストの生涯をドラマ化しました。それらは、彼の若い生徒たちの心に忘れられない印象を残しました。仕事のうえでも、ネストルは舞台俳優としてどんどん有名になり、彼のパントマイム劇団「アツミミク」はチリとアルゼンチンのいくつかの町に公演旅行しました。ネストルはまた、教育者としても人々から愛され尊敬され、やがて、テムコのフロンテラ大学で教授に就任しました。

大学でのネストルの生徒のひとり、カロリーナ・ウルティアは彼からとても特別な印象を受けました。彼女は、ネストルがほかの才能ある人々とどこか違うと感じました。そう感じれば感



ルイス・カンボス



マリア・レイニヤンコ

じるほど、その訳を知りたくなりました。ネストルは、喜んで彼女にイエス・キリストの福音について話しました。そして、その結果、ネストルは彼女にバプテスマを施す特権に恵まれました。その後、カロリーナとネストルは、ほかの生徒たちや、女優であり教師でもあるマリア・レイニヤンコの改宗に影響を及ぼすことになりました。

カロリーナは福音を知り、天父と人々への愛がさらに深くなったことを確信しました。ある安息日、タクシーで教会へ向かう途中、運転手が彼女の持っている書物、つまり標準聖典に興味を抱きました。車内でだんだんと打

ち解けた会話をするようになり、教会に着くと、カロリーナはこの運転手を集会に招待し、宣教師にも紹介しました。教会について学んだ時、このタクシー運転手ルイス・カンボスは、純潔の律法が与えられた意義や生ける予言者のみ言葉に深い感銘を受けました。こうして2カ月後、彼はバプテスマを受けました。

一方、チャン市に住むカロリーナの母も、帰省中の娘から証を聞いた後、教会に加わりました。

エラルド・トレス、ロベルト・ヒメネス、ネストル・ブラボ、そのほかの人々の美し

いつながりによって何人の人がバプテスマを受けたことでしょうか。これは、年を追うごとに、答えるのがむずかしくなる質問です。次々に、会員の家族がバプテスマを受けています。多くの新会員が、専任宣教師として働き、友人に福音を紹介しています。そしてその友人がまたほかの友人に福音を紹介するようになります。決して終わることなく繰り返されていくのです。

少しずつ少しずつ、会員から会員へ、愛のきずなはチリの至る所の改宗者の心をつないでいきました。これと同じことが、世界じゅうで起きているのです。

卒業したら伝道に出ると友人に約束した大学生エラルド・トレスは、その後どうしたでしょうか。彼は約束を守り、大学卒業後、チリ・サンティアゴ南伝道部への召しを受けました。彼から家に届く手紙には、福音を人々に伝



アレハンドロ・アラングアと
奥さんのロレナ、
そして子供たち



カロリーナ・ウルティアの母、
カルメン・レテイシア・カステイヨ

えるときに感じる喜びの証がたくさん書かれています。

興味深いことですが、このチリにおける教会の成長は、末日聖徒が厳しい迫害に遭い、反モルモンからのメディアを使った嫌がらせがあった時さえ、滞ることはありませんでした。そればかりか、いかなるものも人々の信仰を弱めることはできませんでした。限りなく続く輪のように、新会員と昔からの会員が愛、証、そして福音がもたらす祝福への感謝の思いによってつながれていったからです。

チリの人々が回復された福音を受け入れた時に、主は私たちの住んでいる地に、平和と繁栄の祝福を与えてくださいました。スペンサー・W・キンボール大管長は、チリの人々に大いなる愛を示し、「レーマン人はばらの花のように咲きほこる」と語りました。この予言が成就しつつあることを、私た



カロリーナ・ウルティア

ちは毎日、目の当たりにしています。

これらの人々について予言者ニーファイは次のように記しています。「そしてイエス・キリストの福音がかれらの中に宣べ伝えられるから、それによってかれらは自分らの先祖のことを知り、またその先祖がイエス・キリストのことをよく知っていたことも知るようになる。」(IIニーファイ30：5)

愛のきずなは私たちを結び、主の教会の会員としてひとつにします。これは、人に不死不滅と永遠の生命とをもたらす天父のみ業の始まりにすぎません。□

ホセ・ロベルト・アラルコン・ナバレッテは、チリ・テムコステーキ部でステーキ部長を務めている。

創造

「**モ**ーセ主に申して言いけるは、
神よ、しもべ あわれ僕を憐あはれたまいてこの
世とこの世に住める人々と、また諸天
のことを語りたまえ……と。
主なる神のみたまモーセに宣のたまいけるは、諸々もろもろ
の天は数多し、人にとりては数知れず、

されどわれにとりては数えられたり、
諸々の天はわがものなればなり。……

見よ、これわが業にしてわが栄光、
すなわち人に不死不滅と永遠の生命と
をもたらすなり。

さて、わが子モーセよ、……われこ

の天とこの地につ就なんじきて汝に啓示す。わ
が語るところの言ことばを記すべし。われは
始めなり終りなり、全能の神なり。わ
が生ひみたる独ひとり子によりてこれらのもの
を創つくりたり。然り、始めにわれ天と汝
の立たつところの地を創つくりたり。」

第1日

「地は形なくして空しかりき。而して、われ深き淵の面に暗黒を来らしめたり。また、わが『みたま』水の面にありて動きたりき。われは神なればなり。

われ神、光あれと言いたれば光ありき。

われ神、光を觀たるにその光善しか

りき。而して、われ神、光を暗より分ちたり。

われ神、光を昼と名づけ、暗を夜と名づけたり。このことを、われわが力の言によりて為したり。而してわが言の如く成りぬ。夕あり朝あり、これ第一の日なりき。」

PHOTOGRAPHY BY FLOYD AND WILLIE HOLDMAN







第2日

「われ神、また言いけるは、水の中に大空あれと、而して誠にわが言の如く成りぬ。またわれ言いけるは、大空水と水とを分つべし、と。而してこのこと成りぬ。

われ神、大空をつくりて誠に大空の下の大なる水を、大空の上の水より分ちたり。而して誠にわが言の如く成りぬ。

われ神、大空を天と名づけたり。夕あり朝あり、これ第二の日なりき。」



第3日

「われ神言いけるは、天の下の水は一つ所に寄り集れと、すなわちその如く成りぬ。またわれ神言いけるは、乾ける地あれと、而してその如く成りぬ。

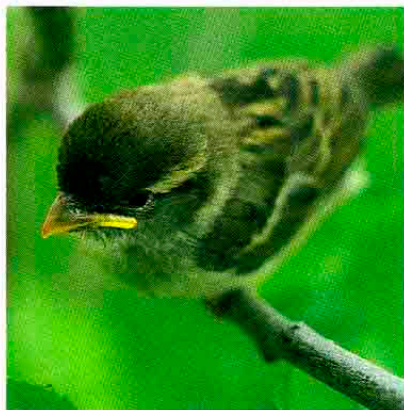
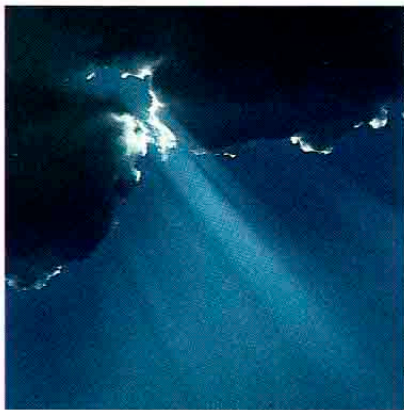
われ神、乾ける地を陸と名づけ、水の寄り集れるを海と名づけたり。而してわれ神、わが創りたりし物皆善しと観たり。

われ神言いけるは、地は青草と、種子を生ずる草と、その種類に従いて実を結ぶ果樹と……を地の上に出すべしと。而して誠にわが言の如く成りぬ。

地は青草と、その種類に従いて種子を生ずるあらゆる草と、その種類に従いて……実を結ぶところの樹を出せり。而してわれ神、わが創りたりし物皆善しと観たり。

夕あり朝あり、これ第三の日なりき。」





第4日

「われ神言いけるは、天の大空に諸
諸の光ありて昼と夜とを分ち、それら
は徴のため、季節のため、日のため、
年のためになるべし。

またそれらは天の大空にある諸々の
光となりて地を照らすべしと、すなわ
ちかくの如く成りぬ。

われ神、二つの大いなる光を造り、
大いなる光に昼を司どらしめ、小さき
光に夜を司どらしめたり。……諸々の
星もまたすなわちわが言に従いて造ら
れたり。

われ神、……これらを天の大空に置
き、

……われ神、わが造りたりしすべて
の物を善しと観たり。

夕あり朝あり、これ第四の日なりき。」



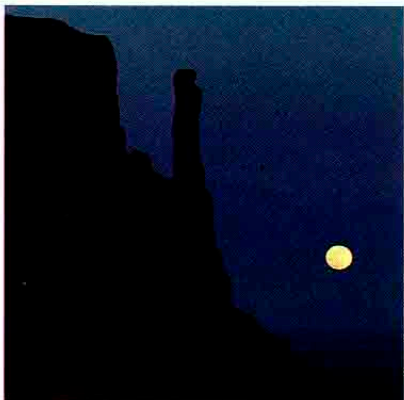
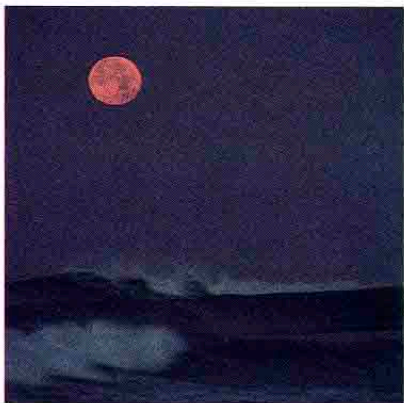
第5日

「われ神言いけるは、水は生きて動
くものを豊に生じ、また天の大空高く
地の上を飛ぶ鳥を生ずべし、と。

われ神、大いなる鯨と水の豊に生ず
る動くすべての生物とをその種類に従
いて創り、また翼のあるすべての鳥を
その種類に従いて創りたり。而して、
われ神その創りたりしすべての物善し
と観たり。

われ神、かれらを祝福して言いける
は、豊に生めよ殖えよ、海の水に充ち
よ、また鳥は地に殖えよと。

夕あり朝あり、これ第五の日なりき。」





第6日

「われ神言いけるは地は生物をその種類に従いて出し、家畜と這うものと地の獣とをその種類に従いて出すべしと。すなわちかくの如く成りぬ。

われ神、地の獣をその種類に従い、家畜をその種類に従い、地のすべての這うものをその種類に従いて造りたり。而してわれ神、すべてこれらを善しと観たり。

われ神、^{はじめ}太初よりわれと共にありたるわが生みし独子に言いけるは、われらに象りてわれらの像の如くにわれら人を造らんと。而してその如く成りぬ。われ神言いけるは、彼らに海の魚と空の鳥と家畜と全地と、地に這うあらゆる這うものとを治めしめんと。

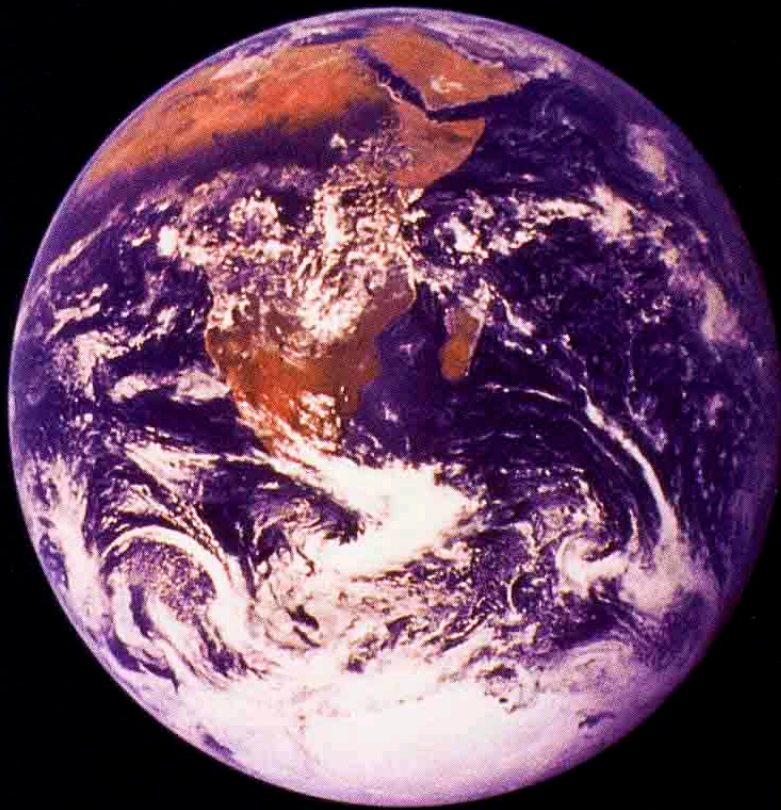
われ神、わが像の如くに人を造れり。わが生みし独子の像の如くにこれを造り、すなわちこれを男と女とに造りたり。

われ神、彼らを祝福して彼らに言いけるは、豊に生めよ、殖えよ、地に充ちよ、地を従わせよ、また海の魚と空の鳥と地の上に動くすべての生物を治めよと。……

われ神、わが造りしすべてのものを観たるに甚だ善しかりき、夕あり朝あり、これ第六の日なりき。」







第7日

「かくの如く天地成りぬ。その万群
ことごとくまた然り。

われ神、第七の日にわが工^{わざ}とそのす
べて造りたりしものを竣^{おわ}りたり。すな
わちそのすべての工^{わざ}を竣^{おわ}えて、第七の
日に休みたり。またわが造りたるすべ
ての物竣^{おわ}りて、われ神、それらを善し
と観たり。

われ神、第七の日を祝福してこれを
聖^よめたり。そはわれ神、その創り為し
たる工^{わざ}をことごとく竣^{おわ}えて、この日に
休みたればなり。」

(モーセ1：36-3：3)□



旧約聖書の楽しみ方

マリー・ハイゼン・ジョンソン

幼いころ私はノア、ダビデ、ダニエルの物語を読んでもらうのが大好きでした。少し大きくなると、子供向けの聖書物語を読むようになりました。そして10歳になった時に、聖書そのものを始めから終わりまで読もうと決意したのです。

何度も聖書を通読しようと試みましたが、結果はいつも同じ——失敗の連続でした。創世記を過ぎるころになると、いつも旧約聖書の複雑さに圧倒されてすぐに読む気がうせてしまうのでした。

やがて19歳になると、私は回復された福音に改宗しました。おかげで、聖書を再発見しました。今では、回復された福音に対する霊的な洞察力が増し加えられ、私にとって聖典は、豊かで尽きることのない喜びの源となりました。

それでも旧約聖書はいまだに読みやすい本ではありません。あまりの長さに、どんな読者でも決意がぐらついてしまいます。旧約のある箇所はただ同じことの繰り返しのようであったり、またある箇所は現代の生活には無関係と思えるような教えが、長々と詳細に述べてあったりします。

皆さんなら、この障害をどのようにして克服しますか。

長年の間に、私は旧約に親しみ理解するうえで役立つと思われるアイデアを、いくつか見いだしました。

第1に、初めから通読しようとしなないことです。そのかわりに、ライオンの洞くつに投げ込まれたダニエルや、ダビデとゴリアテのような、なじみのある物語から始めるのです。エステル記のような短い章を読むのもよいでしょう。このようにすれば、さらにほかの章を読みたいという気持ちになれます。

第2に、飛ばし読みをすることです。もし皆さんが幕屋の長さは何キュビトかということに興味があれば、ほかの章や書に移るのです。そして旧約聖書が、もっと身近に感じるようになったときに、いつでも元の箇所に戻ることができるわけです。

第3に、毎日少しずつ読むことです。1日1章のペー

スが、私にとって最も効果的です。さまざまな律法や儀式についてこまごまと記された箇所を読んでいるときには、特に効果があります。この方法によって、私はさらに気持ちを集中させて、ゆっくりと読むようになり、その結果、興味深い聖句を発見できるようになりました。申命記第29章29節は、そのようにして発見した珠玉の聖句です。(どうぞ、参照してください)申命記の1章1章を注意深く、ゆっくりと読む方法を取らなければ、このような聖句は見落としてしまったでしょう。

第4に、旧約全体を通じて特定のテーマを設けて学ぶことです。自由自在に読めるこの方法は、私にとって楽しい読み方です。私の好きなテーマのひとつが「心」です。たとえば、砕けた心、新しい心、肉の心と石の心、割礼を受けた心などがあります。こうしたテーマやそのほかのテーマを学びながら、旧約聖書の中にある福音について理解を深められるようになりました。

第5に、索引、聖書辞典、相互参照聖句、地図などの補助教材を活用することです。助けが必要であれば、利用できる手段はたくさんあります。

第6に、現在理解できることだけを味わうようにすることです。私は旧約聖書を読むとき、その章全体の雰囲気や意味がつかめるまで、細かい部分で悩まないようにしています。たとえば、イザヤを完全に理解しようとはせずに、イザヤ書を読むこと自体を楽しみます。イスラエルの末日の栄光、ご自分の民に示された主の偉大な愛、約束されたメシヤなどを、想像力豊かに描写しながら読みます。そうすると、私は温かく、やさしい、厳粛な気持ちになれます。イザヤがどのような特定の事件について触れ、過去、現在、未来のいつの時代を述べているのか、必ずしもいつもわかるというわけではありません。しかしイザヤが述べるシオンに、自分も住みたいということだけは、はっきりわかっています。

確かに旧約聖書を学ぶことは、聖典をより深く理解するうえでとても重要です。また、その努力は報われるものなのです。□



アブラハムの契約

万人の祝福のために

ケント・P・ジャクソン

私たちは、神がアブラハムと交わされた契約によって、福音と神権を受け継いでいる。

お おぜいいる主の僕しもべの中でも、その偉大さにおいてアブラハムに匹敵する人物はごくわずかです。末日聖徒は、ほかのクリスチャン、ユダヤ教徒、またイスラム教徒と同じように、アブラハムを信仰の父、神に仕えた模範的な先祖と考えています。この偉大な祝福師にちなんで名付けられた人が世界じゅうに数多くいて、アブラハムの生涯とその行動から受け継いだものと、アブラハムの子孫たちが彼の遺徳に対して抱いている尊敬の念を立証しているのです。

歴史的に見てもアブラハムは称賛に値する人物です。創世記とアブラハム書には、彼が信仰と熱意を持って主に仕えたことが記されています。(アブラハム1-2；創世11：26-25：10参照)聖典は、彼が固い決意を持って神のすべての戒めに従ったことを示しています。アブラハムは神の命にこたえ、自分にとって最も大切な息子

を犠牲に捧げようとさえしたのです。(創世22：1-18；へブル11：17-19参照)主は、契約の民の父祖とするべく、地上のすべての人の中からこの忠実な人を選びになりました。アブラハムの血統による子孫また養子縁組による子孫を通して、男女を問わずすべての人が福音の祝福にあずかることができます。私たちにとってアブラハムは契約の歴史のかなめとなる人物であり、忠実な聖徒たちは、彼の子孫のひとりに数えられることを喜び、彼の義の模範に従いたいと強く望んでいます。

神聖な約束

契約とはふたりの当事者間で交わされる取り決めです。各当事者はその契約に対する同意の表示の一部として、それに伴ういくつかの義務を引き受けます。福音の契約においては、人間は神と神聖な約束を交わし、神のみこころに従うことを約束します。それに対して、神は私たちに、従い、仕えることを条件に輝かしい祝福を約束していらっしゃる。

族長アブラハムは主に仕えることを固く決意し、主と契約を交わす特権を受けられました。聖書には、主がア

ブラハムに約束された数々の祝福が記録されています。それはアブラハムの信仰と従順さのゆえに与えられたものです。その約束には、次の4つのものがあります。

約束1 「ロトがアブラムに別れた後に、主はアブラムに言われた、『目をあげてあなたのいる所から北、南、東、西を見わたしなさい。

すべてあなたが見わたす地は、永久にあなたとあなたの子孫に与えます。』」(創世13:14-15)

約束2 「わたしはあなたの子孫を地のちりのように多くします。もし人が地のちりを数えることができるなら、あなたの子孫も数えられることができますでしょう。」(創世13:16)

約束3 「わたしはあなた及び後の代々の子孫と契約を立てて、永遠の契約とし、あなたと後の子孫との神となるであろう。」(創世17:7)

約束4 「また地のもろもろの国民はあなたの子孫によって祝福を得るであろう。」(創世22:18)

アブラハムとサラの息子イサク、孫ヤコブも同じ約束を受け、アブラハムと同じ契約、義務を引き受けました。(創世26:1-4; 28:10-14; 35:9-12参照)同じようにして、その契約はシナイにおいて、この3人の子孫、すなわちイスラエルの民との間で更新されました。(出エジプト19:1-8参照)この血統に属する人々はその受け継ぎにより同じ祝福にあずかり、偉大な父祖たちと同じ義務を引き受けます。主は現代において、聖徒たちとの間でその契約を更新されました。(教義と聖約84:33-40, 48; 110:12参照)

それによって、現代の末日聖徒は族長たちの契約が、神と末日聖徒との間に交わされた契約であることを正しく理解できるのです。

前記の聖句は、ほかの聖句と相まってアブラハムの契約の4つの重要な点を強調しています。

1. 約束の地

主はアブラハムとその妻サラ、また契約による子孫たちに、カナンの地を祝福としてお与えになりました。末日の啓示は、主がほかにも約束の地を定めていらっしゃることを明らかにしています。そのひとつが、ヨセフの子孫の嗣業地として約束されたアメリカ大陸です。(III ニーフアイ 15:12-13; 16:16; イテル 13:8参照)

しかし聖典には、この約束は民の正しい行ないを条件に成就されるとはっきり述べられています。旧約聖書には、民が仕えることを拒んだために、主が嗣業地の約束の実現を引き延ばされたことが記録されています。最初の例は、

墮落した行ないの結果として約束の地から除かれた北の十部族です。(列王下17章参照)そして後には、ユダとベニヤミンの部族も同じ道をたどりました。(列王下24-25章参照)主は古代イスラエルの民に祝福をお与えになるのを拒まれたことがあります。それは民が祝福を受けるふさわしさを身につけることができず、約束の地を受け継げるかどうかはひとえに従順さにかかっているという主のみ言葉を、彼らみずからが成就してしまったからです。(申命記4:25-27;



神は、契約に従うことを条件に、アブラハムとその子孫にカナンの地を与えられた。

28：15，62—64参照)

約束の地は神聖な契約による祝福として与えられるものです。したがって契約の民がそれを受けるには、必ず契約に伴う条件を満たさなければなりません。イスラエルの散らされた部族が古代のアブラハムの契約を再び受け入れるときに、主は彼らを平和のうちに、完全な形で集められるのです。(II ニーファイ 6：11；10：7—8 参照)

2. 子孫が大いに増える

アブラハムの契約の祝福で最もよく知られているのは、子孫が大いに増えるという祝福ではないでしょうか。主はアブラハムに、彼の子孫は星の数のように増えると約束されました。現在、数多くの人々がアブラハムを祖と仰いでいますが、その事実の中に、この約束の部分的な成就を見て取ることができます。何万人ものユダヤ人と同様に、無数のアラブ民族もアブラハムを自分たちの祖であると見なしています。そして850万人以上の末日聖徒も同じく、アブラハムを自分たちの父祖であると考えています。さらには、10億人以上のほかのキリスト教徒、イスラム教徒も象徴的な意味において、アブラハムを自分たちの父祖と見なしているのです。これらの数字は、神がその高貴な僕にお与えになった約束が成就していることを印象深い形で示しています。

しかし、主のこの約束は、最終的にはそれとは異なる方法で成就します。近代の啓示あかしはそれが天において成就されることを証あかししています。



主はアブラハムに、子孫が星のように数限りなく増えると約束された。

「アブラハムはその子孫とそのすえ(わが僕ジョセフ汝もそのすえなり)に就きて約束を受けたり。すなわち、そのすえはこの世よに在らん限り存続すべく、またアブラハムとそのすえにつきは、ほかの世に在りても絶ゆることなかるべきことこれなり。この世よにありてもまたこの世よの外に在りても、空の星の如く数多くして絶ゆることなく、すなわち浜いさごの砂は数えらるとも彼らを数え尽し得ざるべし。」(教義と聖約132：30)

アブラハムに与えられた、子孫が大いに増えるという約束は、地上における子孫のみならず、永遠の世にも関係しているのです。(ブルース・R・マッコンキー「福千年のメシヤ、人の子の再臨」pp. 262—264, 267参照)確かに私たちは昇栄、永遠の家族、神とそのみ業の本質について知識を与えられていますが、アブラハムへの主の約束の奥の深さは到底理解することができません。

3. 神権と福音の祝福

アブラハムの契約に伴う約束のひとつに、忠実な契約の継承者は福音と主の神権の権能を授かるというものがあります。契約によるアブラハムとサラの子孫は、その相続権によって、これらの祝福を受ける権利を得ています。しかし、契約がもたらすほかの祝福と同じように、それも一人一人のふさわしさを唯一の条件に、生得権の祝福として実現するのです。

ひとつの重要な聖句がその権利について次のように教のろえています。「われは汝を祝する者を祝し、汝を咀のろう者

を唱えん。また汝(すなわち汝の神権)により、汝のすえ(すなわち汝の神権)による、そはこの権能は汝によりて継続し、また汝のすえ(すなわち文字通りのすえ、汝の体より出でたるすえ)によりて世界の眷族ことごとく祝福を得ん、すなわち福音の祝福にして救いの祝福、すなわち永遠の生命の祝福を得んと言ふ約束を汝に与うればなり。」(アブラハム 2 : 11)このように、神権はアブラハムとサラの子孫の中に存続していくのです。福音と神権が世から取り去られた背教の時代がありましたが、それでもそのふたつは回復の時に至るまで、アブラハムの血統の中に隠し保たれてきました。そして回復の時に、それらは再び明らかにされたのです。

「この故に、かくの如く主汝らに言う。汝らはすなわち代々父の血統によりて神権を有つ者たちなり。

何となれば、汝らは肉に由りて正当なる世つぎにして、神の中にキリストと共にこの世より隠されたればなり。

すなわち、この故に汝の生命と神権とは依然残されたり。而して世の始めよりこの方すべての聖なる予言者の口によりて語られたるすべての事の回復する時まで、汝と汝の血統とによりてこれは必ず依然残らざるべからず。」(教義と聖約86 : 8—10)

4. 人々を救いに導く使命

聖典には、アブラハムとサラの契約の家系を通して「世界の眷族ことごとく祝福を得ん、すなわち福音の祝

福にして救いの祝福、すなわち永遠の生命の祝福」(アブラハム 2 : 11)を得るということが教えられています。アブラハムの家系を通してもたらされる祝福のうち最も重要なものは、イエス・キリストの贖いの犠牲です。

アブラハムとサラの子孫であられたイエスは、贖いを通してすべての人に祝福をもたらされました。イエスの贖いによって、万人が復活を通して死の縄目から救われ、赦されない罪を犯すことなく人を除き、すべての人がいづれかの栄光の階級で永遠の受け継ぎを受けるのです。

人々の救いにかかわるアブラハムの使命の第2点は、福音とその祝福を神の子供たちに伝えよという、アブラハムの契約の子孫に与えられた召しです。主はイスラエルの民を、世の人々に福音を伝える業に召していらっしゃいます。主はアブラハムに、その子孫について、次の事柄を説明されました。「汝の子孫は万国の民にこの導きと教えを施す職と神権とを携えて行かん。」(アブラハム 2 : 9)

アブラハム、イサク、ヤコブの時代以来、福音の祝福は

それが地上に存在するかぎり、イスラエルの民を通して人々に伝えられてきました。つまり、アブラハムとサラの子孫は選ばれた民なのです。イスラエルの民が選ばれたのは、彼らが救いに近い道にいるからではありません。神がほかの民よりも彼らを選ばれたからです。彼らは仕えるために選ばれているのです。それは、一人一人の末日聖徒が教会の召しに選ばれているのと同じです。イスラエルの民の選ばれた状態を、福音のほかの召しと同じ



アブラハムの契約の継承者は
主の神権を受ける権利を
持っている。

ように、奉仕への召しとして考えるなら、その召しを正しく理解することができるでしょう。

アブラハムの契約は、アブラハムの血統に属さない人々にも非常に直接的な方法で祝福を及ぼします。イスラエルの家とは、主の聖徒によって構成される家族です。聖典によれば、福音を受け入れてアブラハムの契約に入る人は、たとえアブラハムの血統に属さない人でも、イスラエルの家の一員になります。主はアブラハムに、彼の血統でない、地上の民について次のように教えられました。

「われ万国の民を汝の名によりて祝福せん。この福音を受くる者は皆汝の名によりて呼ばれ、汝のすえに数えられ、立ち上がりて汝をその父として祝福すればなり。」(アブラハム2:10)

パウロも、アブラハムの家系に養子縁組されたイスラエル以外の民について、同じ教義を説いています。「キリストに合うバプテスマを受けたあなたがたは、皆キリストを着たのである。もはや、ユダヤ人もギリシャ人もなく、奴隷も自由人もなく、男も女もない。あなたがたは皆、キリスト・イエスにあって一つだからである。もしキリストのものであるなら、あなたがたはアブラハムの子孫であり、約束による相続人なのである。」(ガラテヤ3:27-29)

アブラハムの子孫でない人々も、福音を受け入れるなら、養子縁組の原則によって、アブラハムの家系に数えられるのです。主はそのような人々も契約の継承者と見なし、その祝福と義務をお授けになるのです。そし

て彼らはイスラエルの家の家族となります。(私たちは祝福師の祝福を通して自分の血統を知ることができます)こうして、アブラハムの文字どおりの子孫か、養子縁組による相続人か、という区別はなくなります。彼らは皆「キリスト・イエスにあって一つだから」です。

この末日の時代に、主は古代の族長の契約による子供たちを、「異邦人の光……この神権によりてわが民イスラエルを救う者」とお呼びになりました。(教義と聖約86:11)アブラハム、イサク、ヤコブの末日の子孫に与えられているふたつの伝道の召しは、(1)イスラエルの家の残りの人々を、彼らの父祖が神と交わした契約に立ち返らせて集合させることと、(2)彼らとひとつになりたいと願うすべての人を集合させることです。

主は万人の祝福のために、近代において福音を回復なきいしました。忠実な人々はすべて、バプテスマと神殿の誓約を受け入れ、正しい生活をすることによって、その祝福を完全に受けることができます。主の聖徒たちは契約の祝福を受ける機会に浴し、それに従

って生きる特権を与えられていますが、同時に、その祝福を御父のすべての子供たちに伝えるというすばらしい機会と大きな責任も引き受けているのです。□



**アブラハムの契約による
子供たちは、
神の残りの子供たちに
福音を伝える召しを受けている。**

ケント・P・ジャクソン——ブリガム・ヤング大学古代聖典学准教授、近東学科主任

しるしを求めていた私

天使か何かしるしを見なければ、
あかし
確固とした証なんて得られないと思っていました。



アマダ・マリオッティ

「奇跡が起きれば、本当かどうかははっきりわかるのに。」私はいつもそう思っていました。地を揺り動かすような出来事で証明されないかぎり、何かを信じるなんて、できなかつたのです。私は教会員の家庭で生まれ、育ちました。ミューチャルやガールズキャンプにも参加し、若い女性のモットーも暗唱しています。ビーハイブクラスの役員を経験したことだってあります。それでもやはり、教会が真実であるという確信は持てませんでした。

燃えるような気持ちとか、温かい心持ち、平安、すばらしい感じなどについて、教会の人たちが話すのをよく耳にしますが、私について言えば、何の感じもありませんでした。毎晩祈ってはいましたが、判で押したようにいつも同じです。「両親に感謝します。すべての祝福に感謝します。よい日を過ごし、正しいことを行なえるように助けてください。」つまり、親の証に寄りかかっていた、ということです。

そんな私も、ついに自分で証を得ようと決心しました。毎晩5分ほど祈って、奇跡を起こしてくださいと神様に願いました。涙を流したり、交換条件を出したり、奇跡を起こしてくだらないのなら悪い娘になる、とまで祈

ったりもしました。ほんの少しでいいから、とにかく天の使者を遣わしてください。そうしたら、絶対に信心深いクリスチャンになりますと、神様に約束までしました。もちろん、そんなやり方でうまくいくわけがありません。でもそのときの私にはわからなかつたのです。

この件についてはモロナイをはじめ、何の使者の訪れもないまま幾日かが過ぎました。ついに、それまで思いついたことのない考えが心にわきました。信仰です。私はいつも、自分もジョセフ・スミスのように奇跡的な訪れを受けられる、と思っていたのです。神様が信仰を持つように願っていらっしゃるとは、思いも寄りませんでした。これは私には受け入れにくい考えだつたのです。

私は教会について目もくらむような確信を得たいと望んでいました。でも、信仰を行使しなければ、神様は証を授けてくださることができない、ということがだんだんわかるようになってきたのです。今はもう奇跡を望んではいませんし、何が本当の証かもだんだんとわかるようになりました。信仰とは確かに、まだ見ていない、望んでいる事柄を確信することなのです。(ヘブル11：1 参照)□



「ヨセフを祝福するヤコブ」 ハリー・アンダーソン画

ヤコブはヨセフを祝福して言った。「ヨセフは実を結ぶ若木、泉のほとりの実を結ぶ若木。その枝は、かきねを越えるであろう。」(創世49: 22)

ベルリンの壁が崩れ、ドイツ
じゅうの聖徒が喜びの声を
上げた。レーマン家は、手にした
新たな自由をすばらしい業に用いた。
ミハイル、ペーター、マッチ
アスの3人の兄弟が、そろって合
衆国での伝道に旅立ったのだ。
(本誌「奇跡の伝道」p.12参照)

